

## 道仙化学製陶所窯跡第5次発掘調査成果報告

米田浩之<sup>\*</sup>・木立雅朗<sup>\*\*</sup>

### はじめに

2010年9月4日から9月14日にかけて、道仙化学製陶所窯跡の第5次発掘調査を実施した。道仙化学製陶所の窯跡（以下、道仙窯）は、京都市東山区五条橋4丁目に所在する明治時代から昭和時代にかけて理化学陶磁器の生産を担った京式登り窯である。

初代の入江道仙は嘉永5（1852）年より陶器の製造を始めた。2代目から理化学陶磁器を製造しはじめ、3代目の時（明治26（1893）年～昭和21（1946）年）には理化学陶磁器製造で隆盛を極めた。そして、昭和18（1943）年、いわゆる会社統制法によって「道仙化学製陶所」が設立される。昭和21（1946）年に4代目が踏襲するが、五条坂における理化学陶磁器の製造は次第に衰退し、昭和43（1968）年に窯の操業を停止する。登り窯は操業停止後20年近く物置状態であったが、痛みが激しく危険な状態になったため、覆屋ごと取り壊された。窯に到る露地が狭く機械や自動車が入れないため、窯を取り壊した部材が山積み状態のまま放置された。そのため、2004年に最初に現地を訪れた際には現地は「遺跡状態」であった。

2005年度に「登り窯を保存・活用する会」による窯の保存を兼ねた地域の活性化策の一環として発掘調査を行ったところ、窯の基礎部分が良好に残っていることが判明したため、以後2010年度にかけて5次にわたる発掘調査を実施した。

道仙窯は近世から現在まで京焼の生産地として栄える五条坂地域に位置する。京焼に関する調査・研究は、これまで主に文献資料と伝世品とを対象として進められ、その時代的な流れや名工と呼ばれる陶工の実態などが研究されている<sup>1)</sup>。さらに近年、江戸や京都など各地の消費遺跡からの出土資料が蓄積されたことによって、新たに考古学的な知見からの京焼実態の解明が試みられるようになった。なかでも、1997年から2000年にかけて京都市埋蔵文化財研究所によって調査された平安京左京北辺四坊の公家町跡出土の大量の京焼出土品は、京焼の変遷を考える上で重要な役割を果たす遺物群であるといえるだろう<sup>2)</sup>。そして2006年には、京都国立博物館にて『京焼 - 都の意匠と技 -』と題する特別展覧会が開催され<sup>3)</sup>、伝世品と出土品との双方を取り上げた展示が行われることとなった。

このように文献史料や伝世品を扱った研究の充実だけでなく、発掘調査による資料の増加によって編年や銘に関する考古学的研究にも進展が認められるなかで、窯そのものの発掘調査に関しては途に就いたばかりであるために、京焼生産に関する実態については未だ不透明な部分が多い。これに加えて、近代以降の京焼についての考古学的研究の遅滞が京焼全体像の把握を妨げているという問題点が挙げられる。

以上のような京焼研究の現状のなかで、今回の道仙窯の一連の調査は、鳴滝乾山窯や聖護院乾山窯に次ぐ京焼窯の調査であり、また関西における数少ない近現代考古学の実践例でもある点で注目

される。すなわち、これまで追究が困難となっていた京焼生産の実態や近現代の京焼の実態の解明への寄与が期待されるのである。

以下、道仙窯の第5次発掘調査の成果を、並行して実施した文献・民俗調査の成果を交えながら報告する<sup>4)</sup>。なお、本来なら年次を追って報告すべきであるが、第5次発掘調査において最も古い時代の遺構・遺物を検出したため、順序を逆にして報告することにした。(米田浩之)

## 1. 調査の経緯と経過

**調査の経緯** 2004年度に楽只苑社長(当時)・湯浅士郎氏と京都建築専門学校・佐野春仁氏を中心とする「登り窯を保存・活用する会」から、木立雅朗に発掘調査の打診があった。この呼びかけは当時、楽只苑の敷地内で「裏庭」と化していた道仙窯を町おこしのために活用したいという湯浅氏の願いに始まる。これに呼応し、2005年2月から立命館大学文学部テーマリサーチ(LP)「京都の土と社会」ゼミ(担当:木立、田中聡)、及び歴史考古学ゼミ(担当:木立)を主体として調査を開始した。2006年度以降は歴史考古学ゼミを主体として調査を行った。

当初から現代の窯跡であることを理解していたが、京焼窯跡の考古学的調査が遅れており、窯跡の研究材料が民俗事例に限られる状態であったため<sup>5)</sup>、湯浅氏・佐野氏の誘いは都市化が進んだ京都市において初めて確実な窯本体を発掘調査できる極めて貴重な機会であった。加えて、考古学が町おこしと連携できるという意味でも、意義深いものであった。

**過去の調査の経過** 2009年度までの発掘調査は、道仙窯の全貌を明らかにし、登り窯の様態を探ることを目的として実施した。第1次調査は、2005年2月27日～4月24日まで断続的に予備的な調査を行った。窯の5・6の間を掘り下げた結果、窯の基礎部分が良好に残っていることが判明した。そのため、第2次調査では2006年8月2日～9月14日まで、胴木間の西半分と3～6の間との発掘を行った。この際、窯の上に育った桜の木が障害となり胴木間・1の間・2の間の東半分の調査が困難であった。第3次調査では2008年8月19日～9月23日まで、桜の木を伐採して未調査部分を発掘した。第4次調査では、2009年8月17日～9月16日まで、窯の南側の前庭部を発掘するとともに、隣接する浅見五郎助窯の胴木間前の発掘調査と測量調査もあわせて行った。

また発掘調査の傍ら、道仙窯の周辺に住む方々や入江家の子孫の方々の協力を得て、道仙窯に関する聞き取り調査を行った。

**第5次調査の経過**(2010年9月4日～9月14日) 9月4日から調査を開始し、調査前の窯全体の写真撮影を実施した後、測量班・発掘班・ふるいがけ班の3班に分かれ、調査を開始した。

測量班はトータルステーションを用いて基準点および周辺の座標を測定し、9月8日に周囲の測量を完了させた。その後トレンチの図面の作成に移り、9月13日に第1トレンチの平面図と拡張トレンチの平面図・断面図を完成させた。

発掘班は道仙窯と浅見窯の前後関係を明らかにすることを目的として、両窯の間に第1トレンチを設定し、慎重に掘り下げた。9月8日に浅見窯に沿った暗渠を検出した。また同日、道仙窯の下層にごみ穴が存在し、大量に遺物が埋まっていることを確認した。9月10日には、道仙窯の下部構造を探るため、1の間床面に新たに拡張トレンチを設けた。第1トレンチは壁の崩落の危険性が出てきたため同日中に掘り下げを一端断念し、9月11日から断面図の作成にとりかかった。9月14日、第

1 トレンチの断面図を取り終えた後、再びトレンチを可能な限り掘り下げた。この作業によって、ごみ穴の遺物を数多く取り上げることができた。また、ごみ穴のさらに下層に中世の土師器を含む土層を確認したが、最終段階での確認であったため、十分に広がりを確認することができないまま、トレンチを埋め戻し発掘調査を終了した。

ふるいがけ班は発掘した土壌をふるいにかけるなどして遺物を選別した。

野外での調査終了後、10月より遺物の洗浄を行い、2011年1月～7月までに注記作業を行った。また並行して遺構図面の整理を行った。

2011年7月半ば～9月上旬に遺物の接合と分類、9月～10月に実測図を作成し、10月には遺物図版を作成した。

また、この一連の発掘調査に加えて、道仙化学製陶所がかつて事務所を構えた長屋が改装されるにあたって、所有者である入江太津治・麗子ご夫妻のご厚意を受け、旧事務所に保管されていた会社の文書類を調査する機会を得た。文書類の整理は2011年1月より開始し、現在も整理中である。

(米田浩之・木立雅朗)

## 2. 道仙窯の地理的・歴史的環境

**地理的環境** 「河原町五条」から五条通を東に進み鴨川に架かる五条大橋を越えると、やがて左手に「こゝよりひがし五條坂」と記された石碑が見える。この地点から東大路通りの交差点までの緩やかな坂道が五条坂である(図1)。周辺には清水寺・六波羅蜜寺・建仁寺・豊国神社などがあり、観



図1 五条坂周辺図 1道仙窯 2浅見五郎助窯 3旧藤平陶芸窯 4小川文斎窯 5井野祝峰窯 6河井寛次郎窯

光客で賑わう土地柄である。陶磁器の卸売店・小売店が軒を連ねるこの五条坂の中央に、京焼の優品を販売する楽只苑が京町屋の店舗を構える。そして、この店舗の西にある路地を、旧職人長屋を左手に見ながら北へ進んで突き当たったところに道仙窯が所在する（図2）。この東隣には、現在も京焼を製造している浅見五郎助氏所有の登り窯（祥瑞窯、以下浅見窯）が焚口の位置を正反対にして肩を並べるように築かれている。また、路地の西側の旧職人長屋の一角には道仙化学製陶所のかつての事務所が残されており、道仙窯・浅見窯・職人長屋で構成されるこの空間は、登り窯操業当時の空気を現代に伝える貴重な場所となっている。なお五条坂地域には、道仙窯・浅見窯の他に、旧藤平陶芸窯・河井寛次郎記念館・小川文斎窯・井野祝峰窯の計6基の登り窯が現存する。そのうち道仙窯と井野祝峰窯は半壊状態であるが、旧藤平陶芸窯はほぼ完存、河井寛次郎記念館・小川文斎窯は煙突以外が完存している。また、三浦竹泉窯は煙突だけが残っている<sup>6)</sup>。

**歴史的環境** 五条坂の北側・南側の地域は、古くから音羽・五条坂焼の窯場として陶磁器生産の盛んな地域である。文献史料を探ると、『隔莫記』寛文6（1666）年に音羽焼の記事が現れ<sup>7)</sup>、また『当時窯持由緒記』にはこのころ大仏境内鐘鋳町にて音羽屋惣左衛門が窯を持ったという記録が残ることから<sup>8)</sup>、17世紀後半頃の五条坂近辺における作陶の開始が推測される。当初は音羽屋以外の窯元はみられなかったようだが、18世紀に入ると窯元が増え始め、天明2（1782）年には問屋販売組織である五条坂焼物仲間が結成されている<sup>9)</sup>。その後、奥田穎川による京焼磁器の開発を経て、文化年間（1804～1818）には高橋道八や和気亀亭らによって本格的な磁器の生産が始まる<sup>10)</sup>。そして嘉永5（1852）年の時点では『当時窯持由緒記』に9名の窯主の名を<sup>11)</sup>、『本朝陶器考証』に12名の陶工の名を確認できる<sup>12)</sup>。

明治に入ると東京奠都により、京都では人口流出と産業衰退とが顕著になり陶磁器業界も影響を受ける。そこで京都府は、この状況に対して明治政府の政策に呼応し理化学分野での殖産興業を進める。明治3（1870）年に舎密局を設置するに加え、明治11（1878）年にはお雇い外国人としてドイツのワグネルを招聘する。このような時代の流れの中で、入江道仙や高山耕山によって五条坂にて理化学陶磁器の製造が開始されるのである。

その後、五条坂の陶磁器生産は明治18（1885）年頃の貿易不振や、昭和19（1944）年の建物強制疎開などにより打撃を受ける。また昭和33（1958）年には「危機に瀕する五条坂の登り窯」と題する文章が書かれており<sup>13)</sup>、苦しい状況が窺い知れる。この頃、公害が大きな社会問題として取り上げられるようになり、登り窯から排出されるばい煙も問題視されるようになった。昭和43（1968）年には大気汚染防止法が制定され、登り窯は徐々に減少していった。昭和46（1971）年、大気汚染防止法に基づく京都府の告示によって登り窯の使用が制限され、その後、五条坂のすべての登り窯が操業を停止することとなる。

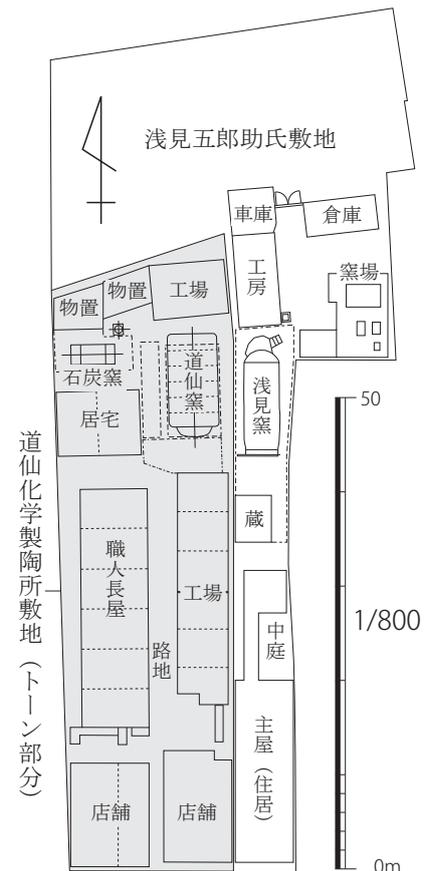


図2 道仙窯・浅見窯周辺全体図  
道仙窯：昭和19年の状況  
浅見窯：現在の状況

操業を停止した登り窯は相次いで取り壊されることとなったが、道仙窯は狭い露地奥に立地していたためかろうじて生き残り、浅見窯と他4基の現存する登り窯とともに、かつての五条坂における陶磁器生産の様子を示す貴重な遺産として佇んでいる。そして五条坂の陶磁器生産業は、幾度かの苦境に立たされることはあっても、その優れた意匠や高い技術が受け継がれ、多くの優品の製造が現在も続けられている。

### 3. 過去の調査の成果

**窯の全体像** 2009年度までの4次にわたる調査の結果、窯体の全貌が明らかとなった(図3・8)。窯は6室の連房式登り窯で、東側が高い自然地形に逆らい、北側が高い人口傾斜に築かれている。窯の全長は11.2メートル、幅は1の間から6の間へと徐々に小さくなり、4.6～5.1メートルを示す。高さは天井が崩されているために定かではないが、倒壊した壁の高さを考慮に入れると2メートル以上はあったものと推定される。1つの部屋の内法幅は現状では約4.2メートル、奥行きは約1.2メートルを測るが、これはある時期に縮小された後の最終段階の規模である。また、窯は南から北へと階段状に登っており、2の間～3の間の段差が約45センチ、それ以外の各部屋間の段差が約36センチである。前述のとおり窯の基底部以外は意図的に崩されており、残存していない。

一般的な京式窯と同様、この窯も壁材は「オオゲタ」と呼ばれるブロックを積み上げ、天井部分は「クレ」と呼ばれる円柱状部材と粘土・陶片などで作られている。

前庭部と胴木間は掘り込み式で、地表より低い部分に作られている。掘り込みは2段になっており、焚口から1段高くなった部分は固く踏みしめられている。焚口は上下2つに分かれ、その間にロストル(灰落とし)が作られていることが判明した。

4・5の間の「二番」と呼ばれる後室側(北半分)には棚板の1段目が残されており、この部分は「火前」と呼ばれる前室側(南半分)と使い分けられていた部分であると想定される<sup>14)</sup>。炎に強い製品を匣鉢のなかにつめて「火前」に置き、「二番」に詰めた棚積みの製品に直接炎があたることを防いだようだ。なお、1・2の間では棚板の1段目(基底部)を確認することができなかった。窯の操業停止後、再利用のために持ち去られたのであろう。

各焼成室の間を仕切る壁の下方に設けられる狭間穴も一般的な京式登り窯と共通しており、横狭間と呼ばれる型式である。

掘り込まれて作られた前庭部の作業空間は、

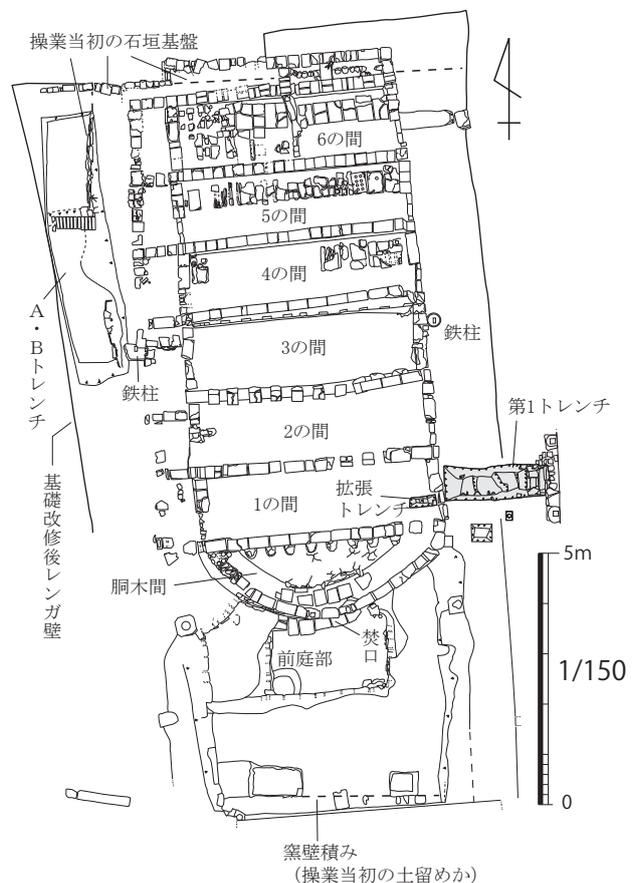


図3 道仙窯平面図

五条坂に現存する他の登り窯に比して掘り込みが浅く広い。聞き取り調査によると、薪の保管場所としても用いられていたようである。

当初、理化学陶磁器を焼成する特殊な窯構造を想定していたが、こうして窯体の全貌が明らかとなった結果、オオゲタやクレを積み上げる構築技法、部屋の形、狭間穴の型式などの点から、道仙窯の構造や焼成技法が通常の京焼の窯、すなわち京式窯とほぼ完全に共通していることが判明したのである。

**窯の修復痕跡** 窯体の検出に加えていくつかの窯の修復痕跡を確認することができた。基盤盛り土の西側通路部分にトレンチを設定して(A・Bトレンチ)調査した結果、操業当初のものと推定される石垣を検出した(図4)。この石垣は北側と東側の基盤の一部にも見られ、東側基盤では石垣の南半分が崩れた後にガラを用いて修復している(図5)。そして、この当初の基盤を後の時代に拡張していることが、石垣より西側に築かれた擁壁や煙出し部分の拡張の痕跡から推測される。さらに、この後再び窯が修復され窯体が現在の規模に縮小されている。このことは胴木間の左右非対称の形状や現存する鉄柱(覆屋の支柱)の位置から読み取れる。

前庭部の調査においては、現在とは異なる古い段階の地割を確認している。操業当初の石垣基盤の方向と一致し長屋の方向とずれる土留め跡が、前庭部作業面下から検出されたのである。現在の道仙窯周辺は基本的には五条通の方向に規定された地割区画に基づくが、道仙化学製陶所の母屋・長屋は僅かに方向を異にしている。建築時期ごとに僅かではあるが方向を異にした可能性がある。また、窯の北域ではこれとは明らかに違った地割区画が存在するため、道仙窯が周囲の建物の変化に対応しながら改修され続けた可能性がある。

なお、隣接する浅見窯は道仙窯と焚口を逆にし、並行して築かれていることから、互いの煙を避けるために計画的に築造されたことが想定される。いずれも自然地形ではなく、鰻の寝床の土地区

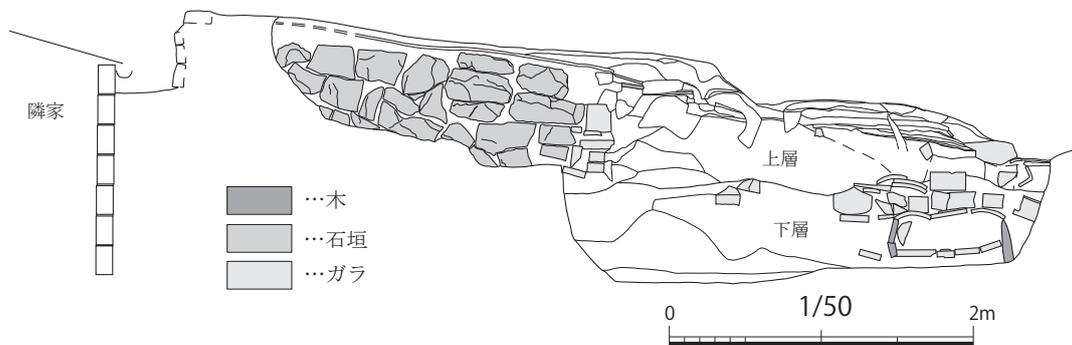


図4 A・Bトレンチ東壁断面図

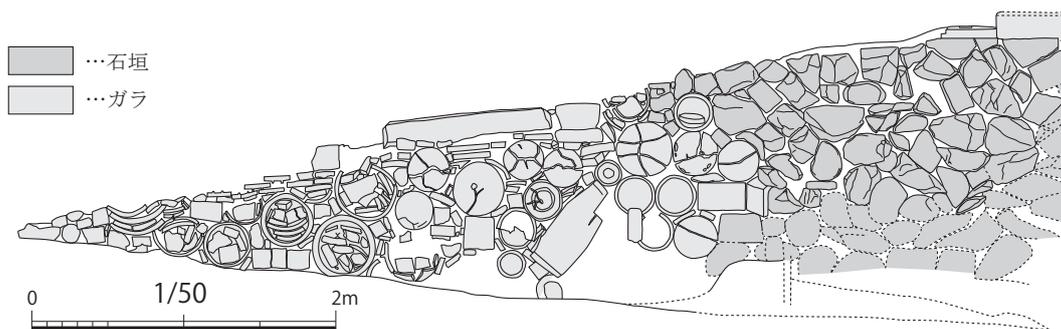


図5 道仙窯窯体東側基盤断面図

画に規制された方向をとっていることからこのことが裏付けられる。

**遺物** 遺物は1の間に匣鉢、2・3の間に匣鉢や蒸発皿・耐酸容器・漏斗・ビーカー・乳鉢などの理化学陶磁器がみられる(図6・7)。2の間西側では理化学陶磁器がまとまって出土しており、これは細部の特徴から、窯の操業停止後、不良品や売れ残りの製品を保管していたものと推測される。また、4・5の間からは複数の工房名をもつ匣鉢の出土があり、これは「後ろの部屋は貸し窯をしていた」という聞き取り調査の結果と合致している。

A・Bトレンチの上層からは理化学陶磁器が多数出土しているため、この層が製陶所の盛期の層であることが窺える。また、「二年一月 作之節」と刻印された石膏型がみられる。節は4代目の入江節(昭和21(1946)年襲名)を示す可能性が高く、年代を推定できる。また、京カンナなど京焼関連道具も確認している。トレンチ上層に多数の遺物が確認できる一方で、下層では理化学陶磁器の出土数は少なくなる。



図6 道仙窯2の間遺物出土状況



図7 道仙窯3の間遺物出土状況

#### 4. 発掘調査の目的と方法

**調査の目的** 前年度までの調査によって道仙窯の窯体が検出され、窯の全体像と大まかな修復の流れをつかむことができた。窯の様態を探ることを意図した調査としてはひとまずの成果を収めたといえるであろう。そこで今回の調査は、道仙窯の理解をより深めることを念頭に置きながら、浅見窯・道仙窯の年代的な先後関係と窯の基盤造成の方法とを明らかにすることを目的とした。

**調査の方法** 隣接した両窯の前後関係をつかむため、道仙窯と浅見窯(図9)との間に2メートル×0.7メートル程度の規模のトレンチ(第1トレンチ・図14)を設定し、層位発掘を行った(図17)。さらに窯の基盤を確認するため、道仙窯1の間内に0.5メートル×0.2メートル程度の小規模の拡張トレンチを設けた。調査で出土した遺物は層位ごとに分け、ふるいにかけて小破片も選別した。

出土遺物は各層位の性格を探るためにそのすべてを種類ごとに分類し、破片数を数えた。さらに、年代確定の手がかりとなる陶磁器・土器類については、器種分類を試みたうえで残りの良いものを中心に持ち上げて観察し、図化した。なお、出土遺物の大部分を小片が占めるため、実測図化した遺物は出土陶磁器・土器類全破片数中わずか1.7パーセントにすぎない。



図8 道仙窯完掘後の状況



図9 浅見窯全体写真

## 5. 発掘調査の成果 (1) - 層序・遺構 -

**層序** トレンチの層位発掘を実施した結果、層序が明らかになった。第1トレンチの平面図・断面図(図10)、拡張トレンチの平面図・断面図(図11)、層序模式図(図12)を示して分析を加える。

第1トレンチの南側断面には、他の層位とは性格の異なる層が、トレンチのほぼ中央部に上下に細長い形で確認できる。これが何を示すのか定かではないが、道仙の敷地と浅見家の敷地との境目に位置することから、この部分より西側が道仙窯側、東側が浅見窯側と定めることができる。

第1トレンチの最下層からは、14世紀に遡る土師器(図13)が出土したため、当地点に新発見の室町時代の遺跡が存在することが明らかになった。道仙窯側にはこの中世土層を掘り込んで形成されたごみ穴が確認され、廃棄されたと思われる大量の遺物がまともに出てきている。そして、このごみ穴を埋めた後に道仙窯の操業面及びそれ以後の層が形成されている。また、拡張トレンチにはごみ穴埋め立て後に形成された道仙窯の基盤層を確認できる。第1トレンチにもみられる橙色礫混じり細砂の焼けた土層が道仙窯の操業面であろう。

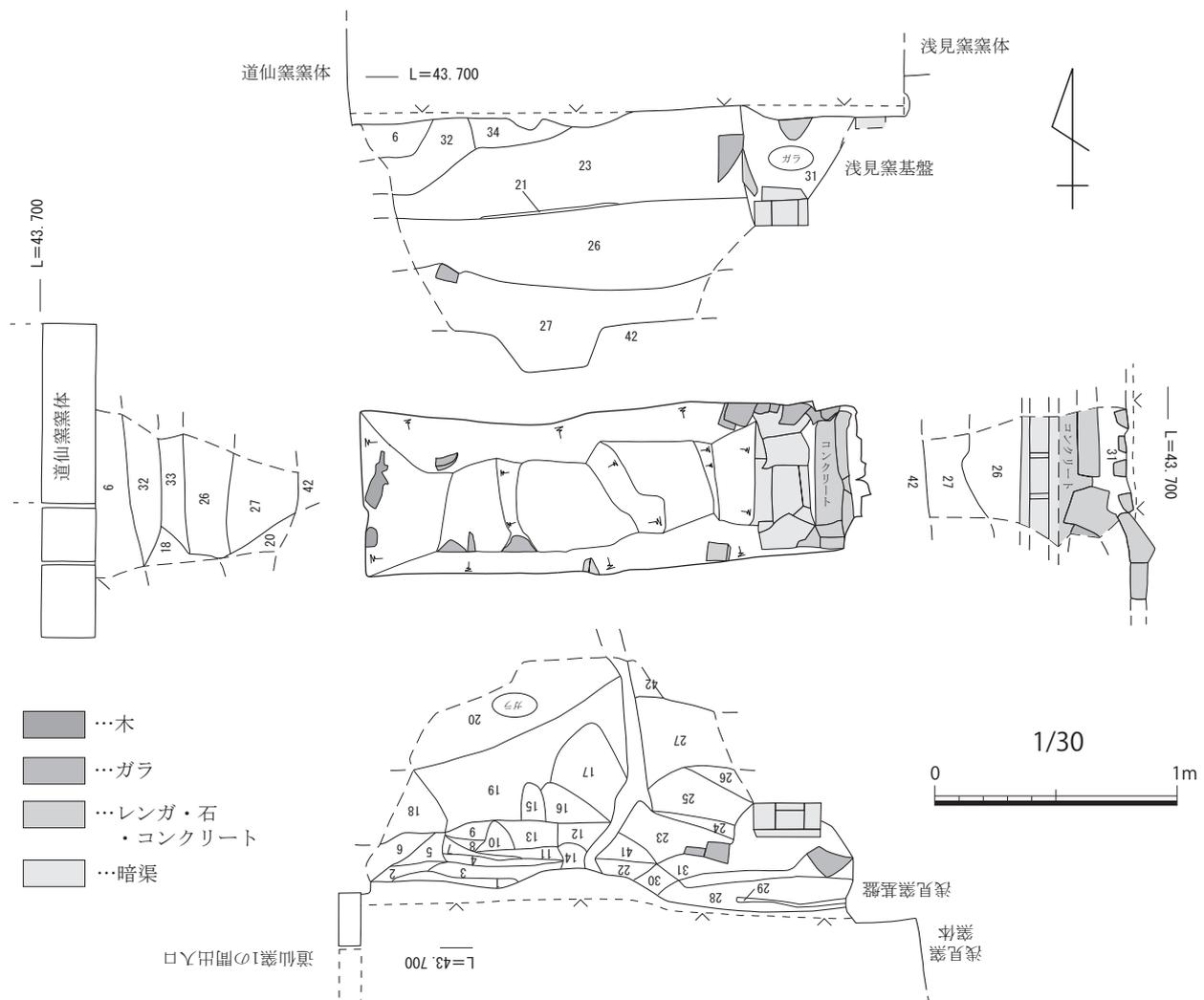


図10 第1トレンチ平面図・断面図

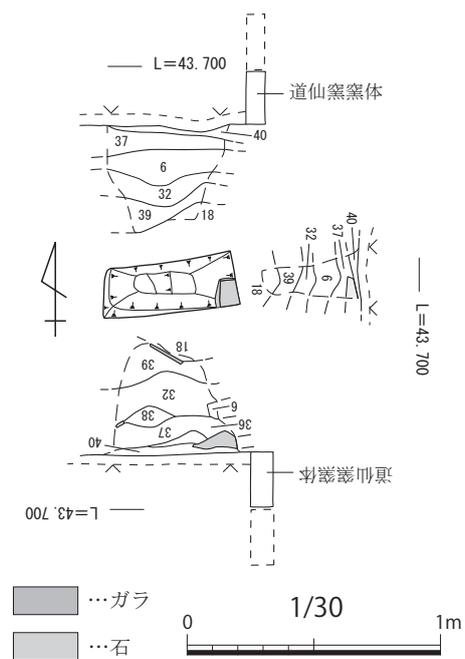


図11 拡張トレンチ平面図・断面図

表1 土層観察表

番号	層名	備考	番号	層名	備考
1	赤黒色シルト		22	にぶい黄褐色粗砂混じりシルト	炭含む
2	黄褐色細砂		23	灰褐色細砂混じりシルト	
3	極暗赤色粗砂		24	灰褐色粘土	
4	黒色シルト		25	黒褐色粘土混じりシルト	
5	赤褐色細砂		26	杯灰褐色礫まじりシルト	
6	橙色礫混じり細砂	焼土	27	黒褐色礫・粗砂混じりシルト	
7	オリブ黒色シルト		28	灰黄色礫混じり細砂	
8	にぶい黄色シルト		29	にぶい橙色細砂	
9	黒色細砂混じりシルト		30	灰黄色礫混じり細砂	
10	灰黄色粗砂混じりシルト		31	暗褐色礫・粗砂混じり細砂	遺物多く含む
11	灰黄褐色粗砂・細砂混じりシルト		32	暗褐色明褐色粗砂混じりシルト	
12	黒褐色粗砂混じりシルト		33	にぶい黄褐色礫・細砂混じりシルト	
13	橙色細砂混じりシルト		34	黒褐色礫混じりシルト	
14	黒褐色細砂		35	にぶい黄褐色礫・粗砂混じり細砂	
15	黒褐色粘土		36	赤灰色粗砂混じり細砂	
16	灰黄褐色粘土		37	灰褐色細砂	
17	黒褐色粘土		38	明赤褐色細砂	
18	黒褐色細砂混じりシルト		39	明赤褐色礫・粘土混じり粗砂	
19	暗褐色礫混じりシルト		40	にぶい褐色細砂	
20	黒褐色礫・細砂混じりシルト	ごみ穴下層、遺物多く含む	41	黒褐色細砂まじりシルト	
21	橙色細砂		42	黒褐色シルト	中世の土層

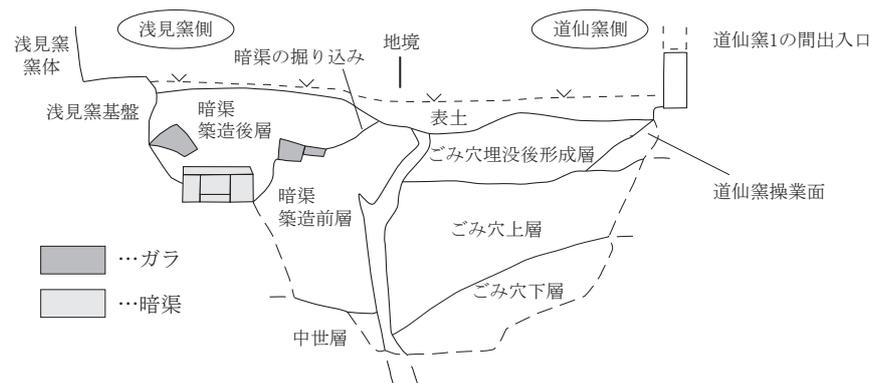


図12 層序模式図 (第1トレンチ南側断面)

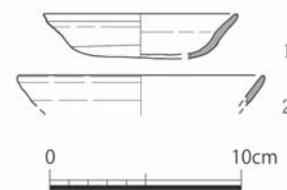


図13 中世土層出土土師器 S=1/4

一方で、浅見窯側には中世土層以降に形成された層を掘り込んで暗渠が築かれており、これは浅見窯の築造後に設けられたものと思われる。そして暗渠築造後の層位には、暗渠に水を浸透させるために埋められたと推測される大量のガラを確認している。

こうして道仙窯側と浅見窯側とのそれぞれの層序が明らかとなったが、双方の層位の関係性をつかむことは困難である。また暗渠が障害となり、浅見窯の下層を断ち割ることができなかったため、浅見窯基盤を確定するに至らなかった。したがって、調査開始当初念頭においた両登り窯の年代的な前後関係を、層序から理解することは難しい。

**遺構** 道仙窯側の下層に確認したごみ穴(図15)は幅1メートル以上、深さ0.6メートル以上の規模を示し、出土陶磁器類の年代から幕末以降に形成されたものと推測できる。遺物に関しては後に詳述するが、使用痕をもつ陶磁器類や貝殻など日常のごみに加えて、素焼・窯道具・窯壁などの陶磁器生産に付随する遺物が多数出土していることが注目される。このことは、ごみを廃棄した者が京焼生産に関わる人間であったことを示すと同時に、道仙窯築造以前に周辺に窯が存在したことを示唆している。

また、道仙窯基盤層が橙色礫混じり細砂の焼けた土層を示していることから、窯の基礎に関してはコンクリートなどを用いた頑丈な基盤によって構築されているわけではないことが判明した。

浅見窯側に築造された暗渠(図16)は幅推定28センチ、高さ13センチの規模を示し、煉瓦によって築かれている。そしてこの暗渠の直上には漏斗状にコンクリートが配置されていた。これは暗渠に水を集めるために設置されたものであろう。先述の通りこの暗渠やコンクリートのために浅見窯の基盤の確定は困難となった。



図14 第1トレンチ(北側から南壁を望む)



図15 道仙窯側下層ごみ穴



図16 浅見窯側暗渠



図17 第5次発掘調査の様子

## 6. 発掘調査の成果 (2) - 遺物 -

**遺物の概要** 出土遺物は、出土層位不明のものを除いて、接合前の破片数を数えると7936点に及び、このうちの大部分を小片が占める<sup>15)</sup>。素焼・窯道具・窯壁という陶磁器生産に関連する遺物が中世土層以外の全ての層位に多数確認できるため、ごみ穴形成時以後一貫して調査地近辺に窯が存在していたか、もしくは廃棄場所として利用されていた可能性がある。以下、各地層出土の遺物について検討を加える。なお、それぞれの地層出土の遺物の器種組成については、小片の器種不明遺物が多く厳密な検討が難しいため、器種の多寡を述べるにとどめる。図示した各遺物の観察結果は表に示すことにより、年代確定の手がかりとなる遺物と生産品もしくは日用品の判断が明確な遺物とを中心に説明を加えたい。

**ごみ穴下層** 遺物組成は、出土遺物全2201点のうち、陶器が30.0%、窯道具が20.7%、素焼が17.0%と多数を占める。これらの遺物は窯業に密接に関係するものであるが、先述のとおりごみ穴が道仙窯基盤層以前に形成されていること、また理化学陶磁器が全く確認できないことから、道仙窯に付随する遺物群ではないものと思われる。窯業色の濃い遺物の出土が目立つ一方、京都以外で生産された陶磁器類・瓦・貝殻など日常生活のごみが少なくないため、ごみ穴下層の遺物は、陶磁器生産に関わるごみと日常生活のごみが混ぜられて廃棄されたものと推測できる。陶器を図18、磁器・軟質施釉陶器・土製品・土師質土器・素焼を図19、窯道具を図20として示し、また、図示した遺物の観察表を表3として示した。なお、土製品・窯道具の観察表に関しては、すべての地層から出土した遺物を一括して表7・8として示すことにした。

陶器は661点でそのうち506点が器種不明である。器種が判明するもののうちでは土瓶蓋が26点、皿が9点、碗が21点、土瓶が36点、行平鍋が9点、灯明皿が13点と目立つ。その他、重箱・油受皿・播鉢・五徳・花生などの出土がある。実測図に示した遺物のうち外面に飛ガンナを施し鉄を塗

表2 各層位出土遺物組成表

	道仙窯側						道仙窯操業面						浅見窯側						表土	
	ごみ穴下層		ごみ穴上層		ごみ穴後層		下層		上層		中世層		暗渠前層		暗渠後層					
	出土数 (点)	割合 (%)																		
土師器	63	2.9	145	5.5	61	4.1	0	0	0	0	14	93.3	92	27.2	6	0.7	13	4		
陶器	661	30	1141	42.9	550	37.4	10	30.3	0	0	0	0	115	34	122	13.9	113	34.7		
磁器	78	3.5	84	3.2	51	3.5	4	12.1	0	0	0	0	13	3.8	23	2.6	8	2.5		
理化学陶磁器	0	0	6	0.2	9	0.6	0	0	0	0	0	0	0	0	9	1	0	0		
軟質施釉陶器	10	0.5	10	0.4	6	0.4	0	0	0	0	0	0	4	1.2	2	0.2	4	1.2		
土師質土器	8	0.4	8	0.3	5	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.6	0	0		
素焼	376	17	444	16.7	312	21.2	5	15.2	2	12.5	0	0	62	18.3	159	18.1	48	14.7		
土製品	49	2.2	55	2.1	8	0.5	0	0	0	0	0	0	4	1.2	3	0.3	3	0.9		
窯道具	456	20.7	430	16.2	224	15.2	6	18.2	12	75	0	0	24	7.1	145	16.5	78	23.9		
窯壁	65	3	100	3.8	99	6.7	4	12.1	2	12.5	0	0	7	2.1	250	28.4	19	5.8		
瓦	115	5.2	88	3.3	75	5.1	4	12.1	0	0	1	6.7	7	2.1	87	9.9	22	6.7		
貝殻	273	12.4	101	3.8	54	3.7	0	0	0	0	0	0	9	2.7	31	3.5	18	5.5		
漆喰	5	0.2	6	0.2	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	22	2.5	0	0		
鉄製品	17	0.8	13	0.5	8	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0.9	0	0		
炭	17	0.8	21	0.8	4	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.2	0	0		
ガラス	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.1	0	0		
木片	0	0	1	0	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.2	0	0		
碁石	0	0	2	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
不明	8	0.4	1	0	1	0.1	0	0	0	0	0	0	1	0.3	3	0.3	0	0		
計	2201		2657		1470		33		16		15		338		880		326			

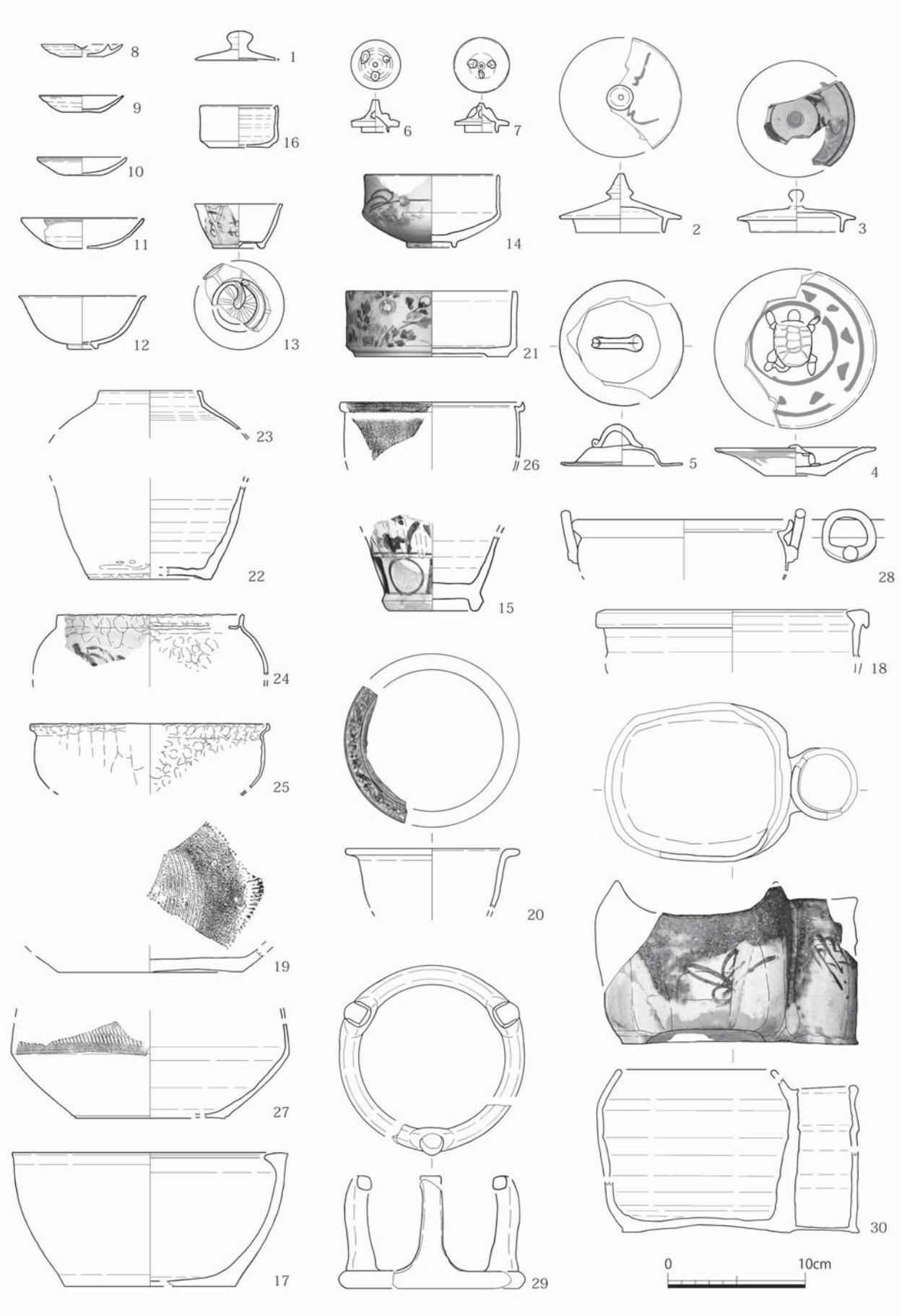


図 18 ごみ穴下層出土遺物① S=1/4 (陶器)

布した行平鍋（図18-26・27）については、これとは別に類似する飛ガンナを施した素焼片が出土しているため、五条坂で生産された可能性が高いといえる。また、手づくねの蓋（図18-5）や土瓶（図18-24・25）は幕末の歌人である太田垣蓮月の作品と似た作風を持つため、五条坂の生産品と推測できる。ただし、蓮月作品に特徴的な和歌が施されないことから、蓮月焼類似品との解釈が妥当であろう。ただ1点のみ体部外面に鉄絵で和歌を施す型作りの碗がみられ（図18-13）、これは型作り技法を特徴とする2代目蓮月の作品と酷似している点で注目される<sup>16)</sup>。その他、一般的に貧乏徳利と呼ばれる瓶（図18-22）については、底部に窯道具が付着し使用痕が認められないことから、生産品の可能性を捨てきれない。高級品と言い難く、京焼の一般的なイメージとかけ離れた遺物に五条坂での生産の可能性が残されることは注意すべきで、これに関しては今後の京焼生産遺跡の調査を俟って検討する必要がある。これらの陶器類に加えて、器種は不明だが「旭亭」の刻印をもつ陶器が出土している（図21）。『日本陶工伝』には、亀屋清吉が「嘉永元年、八幡前之町に開業し、旭亭の印を押していたが、明治七年に廃業の後、同十四年まで、借窯で染付を焼いたといふ」とあり<sup>17)</sup>、この記述を信頼するならばこの遺物の作者を亀屋清吉に比定できる。なお、この年代観は及川登が提唱する1830～40年という年代観より若干新しいものである<sup>18)</sup>。

磁器は全78点で、陶器に比べてごく少量の割合にとどまり、京都産以外のものが一定の割合を占めている。碗が26点と多数を占めるが、全体のうち35点の器種が不明である。器種が判明する磁器のうちでは、底部外面に「道〇」銘の入る碗（図19-5）が注意を惹き、この銘は「道仙」を示す可能性がある。これに加えて禁裏御用を示す菊の文様が入る磁器片がみられる（図22）。理化学陶磁器を製造する以前に2代目入江道仙（1856～1893年）が禁裏御用を引き受けて

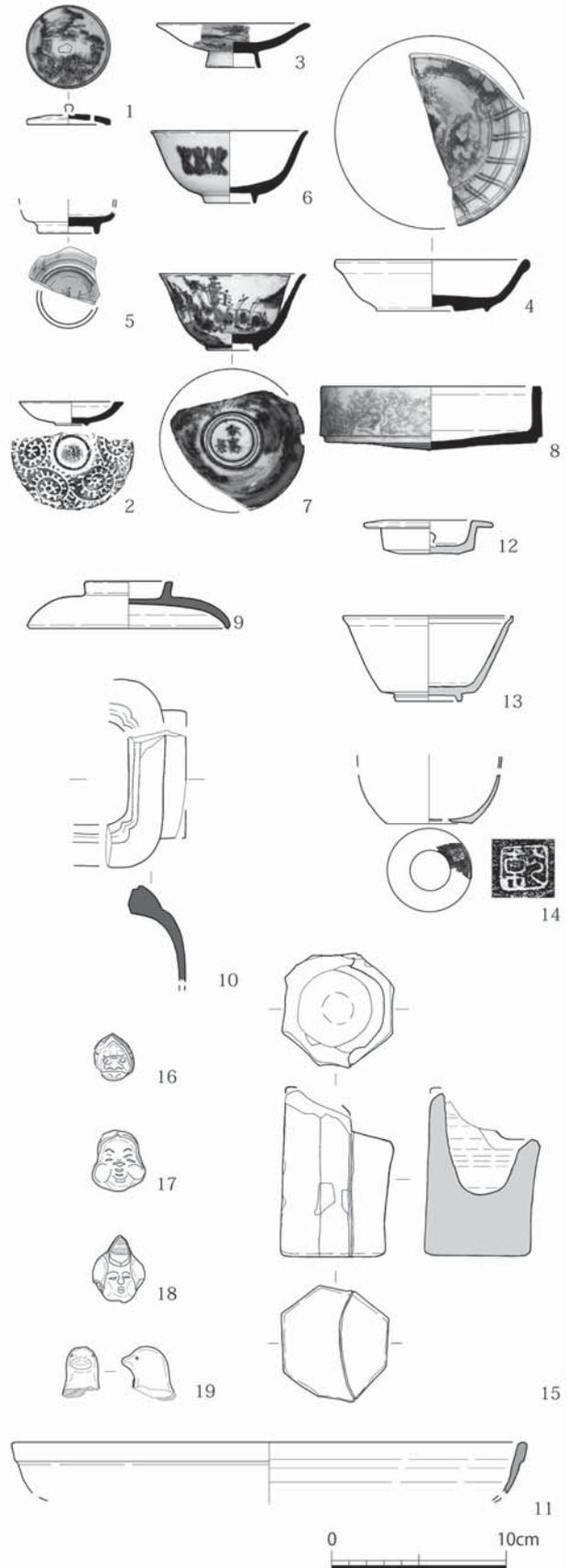


図19 ごみ穴下層出土遺物② S=1/4  
(磁器・軟質施釉陶器・土製品・土師質土器・素焼)

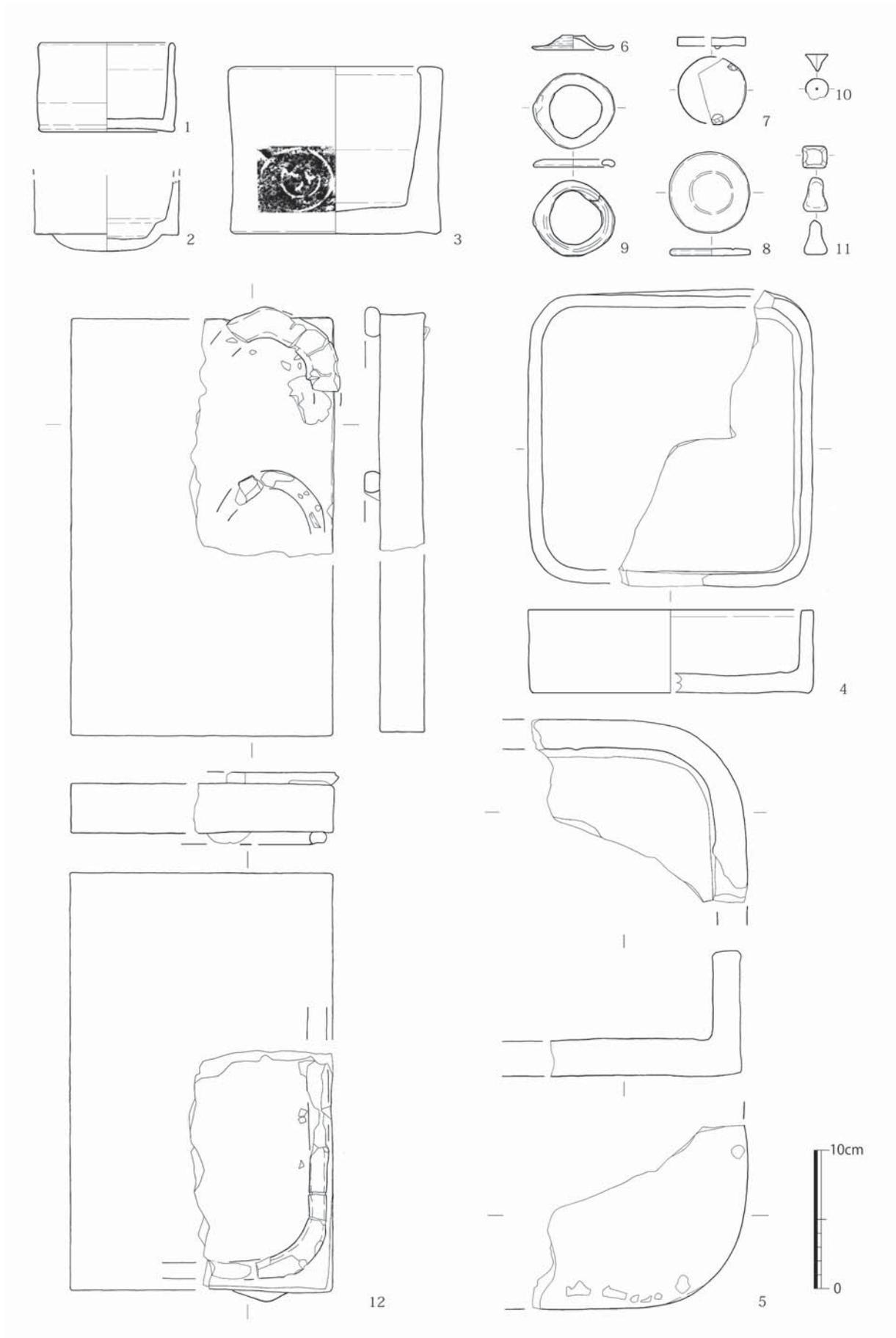


図 20 ごみ穴下層出土遺物③ S=1/4 (窯道具)

表3 ごみ穴下層出土遺物観察表 (土製品・窯道具以外)

図	番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬など	生産地	備考
18	1	陶器	蓋	6.1	2.2	-	灰白	緑釉	京・信楽系	土瓶蓋
	2	陶器	蓋	8.9 (最大)	4.4	-	灰	灰釉・いっちゃん	京・信楽系	土瓶蓋
	3	陶器	蓋	8.6 (最大)	不明	-	灰黄	白化粧・鉄絵・透明釉・緑釉	京都か	土瓶蓋
	4	陶器	蓋	11.8 (最大)	2.3	-	黄灰	灰釉・いっちゃん	京都か	土瓶蓋 還元焼成 鉄分入り 素地 亀形つまみ貼り付け
	5	陶器	蓋	9.0 (最大)	3.1	-	灰黄	なし	京都	急須蓋 手づくね
	6	陶器	蓋	3.7 (最大)	2.5	-	にぶい黄橙	青磁釉	京・信楽系	仏餉具(水玉)蓋 酸化焼成 つまみ飾り貼り付け
	7	陶器	蓋	4.0 (最大)	2.3	-	灰白	青磁釉	京・信楽系	仏餉具(水玉)蓋 還元焼成 つまみ飾り貼り付け
	8	陶器	油受皿	6.0 (最大)	0.9	3.1	にぶい黄橙	透明釉	京・信楽系	
	9	陶器	灯明皿	6.2	1.3	2.8	灰白	灰釉	京・信楽系	口縁部付近外面に使用痕
	10	陶器	灯明皿	6.4	1.4	2.6	灰白	志野釉	京・信楽系	口縁部付近外面に使用痕
	11	陶器	灯明皿	8.9	2.3	2.8	灰白	透明釉	京・信楽系	還元焼成
	12	陶器	碗	9.2	3.9	2.3	灰白	透明釉	京・信楽系	
	13	陶器	碗	6.4	3.3	3.8	灰白	鉄絵・透明釉	京都	型作り 和歌 2代目蓮月製か
	14	陶器	碗	9.8	5.4	3.5	灰黄	灰釉・鉄絵	京都か	半筒碗
	15	陶器	鉢	不明	不明	6.4	白	染付	京都か	
	16	陶器	鉢	5.8	3.1	4.4	灰白	透明釉	京都か	
	17	陶器	鉢	20.0	9.9	12.4	灰白	灰釉	瀬戸・美濃系	底部内面に使用痕
	18	陶器	鉢	18.7	不明	不明	灰白	鉄釉	京都か	還元焼成
	19	陶器	搦鉢	不明	不明	13.4	赤	なし	堺系	
	20	陶器	植木鉢	12.6	不明	不明	灰白	染付	京都か	還元焼成
	21	陶器	重箱	13.4	4.9	11.2	淡黄	鉄絵・染付・白化粧	京都	重箱最下段
	22	陶器	徳利	不明	不明	8.9	オリーブ褐	鉛釉・いっちゃん	京都	底部に窯道具痕
	23	陶器	土瓶	7.5	不明	不明	灰白	灰釉	京・信楽系	
	24	陶器	土瓶	13.6	不明	不明	淡黄	透明釉	京都	手づくね
	25	陶器	土瓶	17.4	不明	不明	灰黄	なし	京都	手づくね
	26	陶器	行平鍋	13.4	不明	不明	褐灰	内面鉄釉・外面鉄塗布	京都	飛ガンナ
	27	陶器	行平鍋	不明	不明	11.0	浅黄橙	内面鉄釉・外面鉄塗布	京都	飛ガンナ
	28	陶器	鍋	15.6	不明	不明	灰黄	鉛釉	京都か	口縁部にアルミナ
	29	陶器	五徳	13.6 (径)	不明	-	灰白	なし	深草か	
	30	陶器	花生	不明	不明	17.2 (最大)	にぶい黄橙	白化粧・緑釉・鉄絵	京都か	
19	1	磁器	蓋	4.7	不明	-	白	染付	京都か	
	2	磁器	坏	6.0	1.4	1.8		透明釉	瀬戸・美濃系	型作り 蛸唐草文様 通称紅皿
	3	磁器	皿	8.8	2.6	3.1		染付	不明	
	4	磁器	皿	11.0	3.0	6.4	白	染付	肥前系	蛇の目凹型高台 底部内面蛇の目釉剥ぎ
	5	磁器	碗	不明	不明	3.4	白	透明釉・上絵付	京都	「道〇」銘 底部内面に付着物
	6	磁器	碗	9.0	4.2	2.8	白	染付	瀬戸・美濃系	
	7	磁器	碗	8.4	4.5	2.8	白	染付	京都	「香齋製」銘
	8	磁器	重箱	12.5	3.7	12.8	白	染付	京都か	
	9	軟質施釉陶器	蓋	11.3	2.8	5.0	灰白	ラスター釉	京都	釉薬剥れる
	10	軟質施釉陶器	不明	-	-	-	橙	鉛透明釉	京都	型作り
	11	土師質土器	焙烙	29.0	不明	不明	にぶい黄橙	-	不明	型作り
	12	素焼	蓋	7.5 (最大)	1.9	-	にぶい黄橙	-	京都	急須蓋
	13	素焼	碗	9.8	5.0	3.8	浅黄橙	あり	京都	本焼失敗品 型作り 外面に面あり
	14	素焼	鉢	不明	不明	5.0	灰白	-	京都	「乾」銘
	15	素焼	不明	-	不明	6.4 (最大)	灰白	-	京都か	型作り製品原型 型合わせ用沈線あり

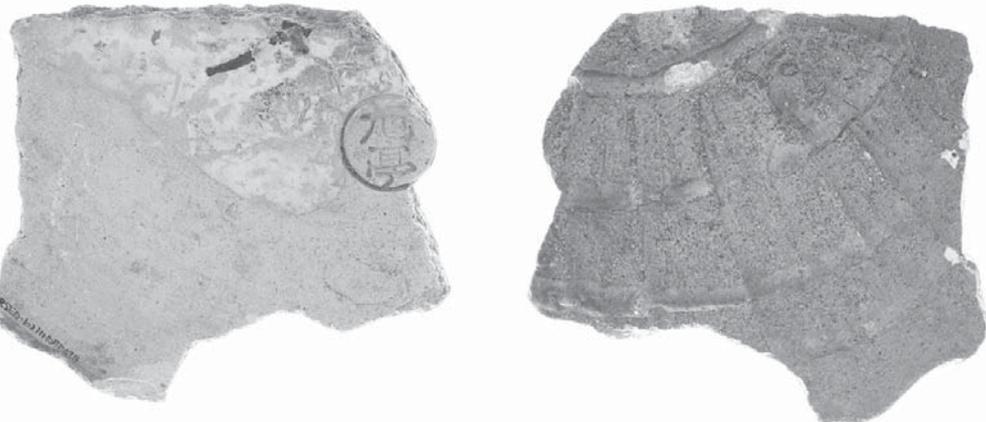


図21 「旭亭」銘をもつ陶器 S=1/2

おり<sup>19)</sup>、これら2つの遺物がこの2代目の時期に道仙によって製造されたものである可能性が残される。その他、底部外面に「香齋製」銘をもつ碗(図19-7)が、宮川香齋の作品と推測される点で注目される。

なお、軟質施釉陶器は小片で占められ、蓋1点(図19-9)以外の器種は不明である。土製品は泥面子と人形とが確認できる(図19-16~19)。土師質土器の焙烙(図19-11)は型作りで、その産地は定かではない。

素焼は生産品であることを断定できる重要な遺物である。急須蓋や碗のほか、底部に「乾」銘を施す鉢が出土している(図19-14)。この銘は嘉永年間(1848~1853)の末に活躍し、「乾亭」と号した音羽屋総太郎を指す可能性が高いことから<sup>20)</sup>、年代を幕末期に比定できる。その他の製品の器種は不明だが、型合わせ用の沈線を持つ型作り製品の原型(図19-15)がみられる。

窯道具は、全456点のうち匣鉢が109点、より土が212点、板トチが91点と他を圧倒する比率を占める。その他に輪トチが10点、足付輪トチが1点、足付板トチが1点、円錐ピンが2点、棚板が3点、エブタが1点確認できる<sup>21)</sup>。板トチは、91点のうち「煎餅」と呼ばれる厚さ0.2~0.5mm程度の薄い例が90点と大部分を占め、厚さ1センチ以上のものはごく少数にとどまる。幕末期には製作の容易な極薄の板トチが主流となっていた可能性がある。また、棚板にはより土が付着しており(図20-12)、匣鉢が6個据えられたことを推測できる。なお出土具殻のうち、大型のものに関しては窯道具として用いられていた可能性を否定できない。

このごみ穴下層の年代の下限は、遺物が示す型式や遺物のもつ銘から明治初期に設定できるであろう。

**ごみ穴上層** ごみ穴下層と同じく大量の遺物を包含する。遺物組成は下層と同じ様相を示し、総出土数2657点のうち陶器が42.9%、素焼が16.7%、窯道具が16.2%と多数を占める。また、ごく少数にとどまるものの、理化学陶磁器と推測されるものが混入している。下層と同じく生産に付随する遺物と日用品とが混在しており、ごみ穴を埋めた際に形成された層位と考えられる。図23・表4として遺物の実測図・観察表を示す。

陶器の器種は全1141点中1008点が不明だが、土瓶蓋が16点、皿が9点、碗が23点、土瓶が22点、行平鍋が7点、灯明皿が9点と目立つ。鉄絵・染付・白化粧を施す重箱(図23-12・13)は、同一組に半還元焼成のものと酸化焼成のものとがみられ、前者は焼成失敗品の可能性が高い。したがって、これら重箱は五条坂にて生産されたものと考えられる。また、下層と同じく蓮月風の手づくね製品(図23-14)や五条坂産の行平鍋(図23-16)を確認できる。

出土磁器は84点とやはり陶器に比して割合が低い。碗が27点という高い割合を占める。上層と同じく京都産以外のものが多くみられ、これらは日用品と推測できる。磁器のなかでは、「幹山精製」銘をもつ急須蓋(図23-21)に注意すべきである。この銘は、乾山伝七の作であることを示し、年代は明治初期に定められる<sup>22)</sup>。

軟質施釉陶器10点のうちではミニチュアの鍋(図23-27)と仏飯器(図23-28)とが確認できる。その他8点の器種は不明である。

土製品のうち人形類は、モチーフの判明する例が比較的多く、人間・猿・狐・魚・鳥などがある(図23-38~45)。そして、型作り技法を示すキラの付着を外側・内面あるいは表面・裏面に観察することができる。なお高火度焼成の箱庭道具(図23-30・31)を便宜上土製品の観察表に含めている。



図22 禁裏御用の磁器  
S=1/2



図 23 ごみ穴上層出土遺物 S=1/4

表4 ごみ穴上層出土遺物観察表（土製品・窯道具以外）

図	番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬など	生産地	備考
23	1	陶器	蓋	6.8 (最大)	不明	-	暗灰黄	緑釉	京・信楽系	土瓶蓋 還元焼成
	2	陶器	蓋	8.0 (最大)	3.7	-	褐灰	灰釉	京・信楽系	土瓶蓋 還元焼成
	3	陶器	蓋	7.6 (最大)	不明	-	にぶい黄	鉄絵・白化粧・緑釉・鉄釉	京都か	土瓶蓋
	4	陶器	蓋	4.2 (最大)	1.3	-	灰白	灰釉・白化粧	京都か	急須蓋
	5	陶器	蓋	13.4 (最大)	不明	-	橙	内面鉄釉・外面鉄塗布	京都か	行平鍋蓋
	6	陶器	蓋	7.8	不明	-	灰白	透明釉	京都か	蓋物蓋
	7	陶器	油受皿	8.4	1.6	3.8	灰白	青磁釉	京・信楽系	還元焼成
	8	陶器	油受皿	6.0	4.3	5.1	浅黄	灰釉	京・信楽系	
	9	陶器	灯明皿	11.8	2.3	5.6	灰白	灰釉	京・信楽系	
	10	陶器	ひょうそく	不明	不明	4.4	にぶい橙	鉄釉	不明	軟質
	11	陶器	搦鉢	34.6	不明	不明	赤	なし	堺系	
	12	陶器	重箱	13.1	4.6	12.9	灰黄	鉄絵・染付・白化粧	京都	半還元焼成
	13	陶器	重箱	13.0	4.7	13.0	浅黄橙	鉄絵・染付・白化粧	京都	酸化焼成
	14	陶器	急須	7.3	不明	不明	灰黄	なし	京都	手づくね 外面に布目
	15	陶器	土瓶	8.2	不明	不明	灰白	透明釉	京都か	
	16	陶器	行平鍋	17.0	不明	不明	にぶい橙	内面鉄釉・外面鉄塗布	京都	飛ガンナ
	17	陶器	鍋	13.2	不明	不明	にぶい黄橙	鉄釉	京都か	
	18	陶器	壺	16.2	不明	不明	灰黄	鉄釉	京・信楽系	還元焼成
	19	陶器	蓋物身	15.2	不明	不明	灰白	透明釉・上絵付	京都か	
	20	陶器	五徳	不明 (径)	不明	-	灰白	なし	深草	「ふかくさ」刻印
	21	磁器	蓋	4.6	2.0	-	白	染付	京都	「幹山精製」銘
	22	磁器	皿	7.2	2.7	2.0	白	染付	京都か	底部内面の絵付の色抜ける
	23	磁器	皿	7.8	2.2	2.8	白	染付	京都か	
	24	磁器	碗	5.8	4.2	2.2	白	染付	不明	
	25	磁器	碗	17.6	9.4	7.8	白	染付	肥前系	
	26	磁器	不明	不明 (径)	不明	9.6	白	透明釉	京都	底部粘土内空気膨張
	27	軟質施釉陶器	急須	3.2	不明	不明	にぶい橙	鉛釉・いっちゃん	京都	ミニチュア製品 型作り
	28	軟質施釉陶器	仏飯器	不明 (径)	不明	3.3	にぶい黄橙	ラスター釉・赤絵	京都	釉薬剥れる
	29	土師質土器	焙烙	28.3	不明	不明	にぶい黄橙	-	津田か	外面に使用痕あり

土師質土器の焙烙（図23-29）は型作りで、津田産の可能性が高い。口縁部内面と底部内面との間に明確な境のないこの型式は、19世紀初頭頃から明治33（1900）年までの期間に製作されていたものである<sup>23)</sup>。

素焼は444点のうちほとんどが器種不明であるが、皿・鉢・土瓶・行平鍋・土鍋を確認できる。

窯道具は下層と同じく、430点のうち匣鉢が109点、より土が212点、板トチが81点と高い割合を占め、4点の輪トチ、5点の足付板トチ、14点の円錐ピンを上回る。これらに加えて棚板を2点、エブタを2点確認できる。足付輪トチの出土はない。板トチのうち薄い例が77点と大半を占める様相は下層と同様である。また、エブタには窯印が刻印されているものがみられる（図23-47）。

遺物からごみ穴上層の年代の下限を明治初期に設定できる。下層形成以後、期間を開けずにごみを埋めたのであろう。

**ごみ穴埋没後形成層** ごみ穴を埋めた後に形成されているこの層からは、1470点の出土遺物があり、遺物の点数はごみ穴と比べると少ない。陶器が550点、素焼が312点、窯道具が224点と割合が高い様相はごみ穴上層・下層と共通するが、土製品の割合が比較的低い点が特徴的である。図24・表5として遺物の実測図・観察表を示す。

陶器類については、土瓶蓋が9点、碗が17点、土瓶が12点、行平鍋が10点と目立ち、その他には皿・急須・鍋・灯明皿・油受皿・筆立てなどの出土がある。筆立て（図24-8）は底部糸切りで竹を模写している。また蓮月風の手づくね作品が32点みられる。

磁器は51点確認できる。器種が判明するものうちではそのほとんどが碗で、19点みられる。このうち口縁部内面に窯道具が付着した碗（図24-12）は、五条坂で生産されたものである。

また、理化学陶磁器（図24-13）の出土は、2代目道仙が生産を開始した明治11（1878）年頃以降の年代を推測させる。軟質施釉陶器に関しては6点のうち、ミニチュア製品の蓋（図24-14）を1点確

認できるが、その他5点の器種は不明である。

土師質土器の焙烙（図24-15）はごみ穴上層出土例と同じ型づくりで、津田産の可能性が高い。口縁部内面が肥大するこの型式は、明治33（1900）年から大正11（1922）年頃までの期間に製作されていたようである<sup>24)</sup>。

素焼は312点中土瓶蓋が4点と目立ち、その他に蓋物蓋・碗・皿・土瓶・行平鍋・土鍋が1点ずつ確認できるが、大部分が器種不明のもので占められる。

窯道具は224点中匣鉢が65点、より土が95点、板トチが50点と、6点の輪トチ、1点の足付板トチ、5点の円錐ピンを出土数で圧倒する。また板トチは、薄い例が49点で、厚さ1センチ以上の例は1点にとどまる。足付輪トチ・棚板・エブタはみられない。

この層位の年代の下限は、焙烙の型式から明治30年よりは遡らないものと推測される。

**道仙窯操業面** 上層と下層とに分けられるが、遺物の出土数は少なく49点にとどまる。下層では

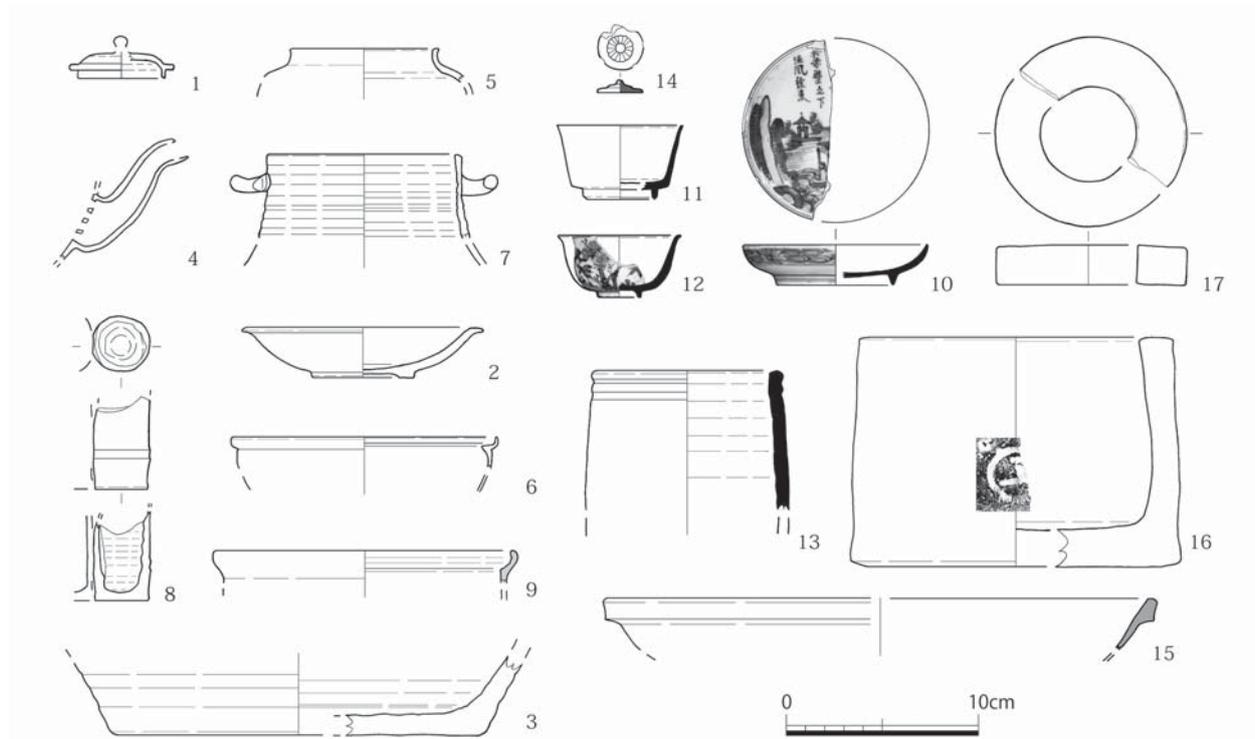


図24 ごみ穴埋没後形成層出土遺物 S=1/4

表5 ごみ穴埋没後形成層出土遺物観察表（土製品・窯道具以外）

図	番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬など	生産地	備考
24	1	陶器	蓋	5.6 (最大)	不明	-	灰白	透明釉	京都か	
	2	陶器	皿	12.6	2.7	5.2	灰白	透明釉	京都か	
	3	陶器	鉢	不明	不明	19.0	橙	鉄釉	不明	
	4	陶器	土瓶	不明	不明	不明	黄灰	透明釉	京・信楽系	還元焼成
	5	陶器	土瓶	7.8	不明	不明	灰白	外面緑釉・内面透明釉	京・信楽系	
	6	陶器	行平鍋	13.8	不明	不明	灰黄	内面透明釉	京都か	
	7	陶器	甕・壺	10.2	不明	不明	灰黄	灰釉	京・信楽系	還元焼成
	8	陶器	筆立て	-	不明	-	灰白	なし	京・信楽系	底部糸切り 竹を模倣
	9	素焼	鍋	15.4	不明	不明	にぶい黄橙	-	京都	
	10	磁器	皿	9.6	2.2	6.1	白	染付	京都か	
	11	磁器	碗	6.6	5.0	3.7	白	透明釉	不明	
	12	磁器	碗	6.4	3.3	2.4	白	染付	京都	口縁部付近内面に窯道具付着
	13	理化学陶磁器	不明	9.4	不明	不明	白	透明釉	京都	道仙の製品か
	14	軟質施釉陶器	蓋	2.4	0.7	-	灰白	鉛緑釉	京都	ミニチュア製品
	15	土師質土器	焙烙	28.3	不明	不明	にぶい黄橙	-	津田か	型作り 外面に使用痕あり

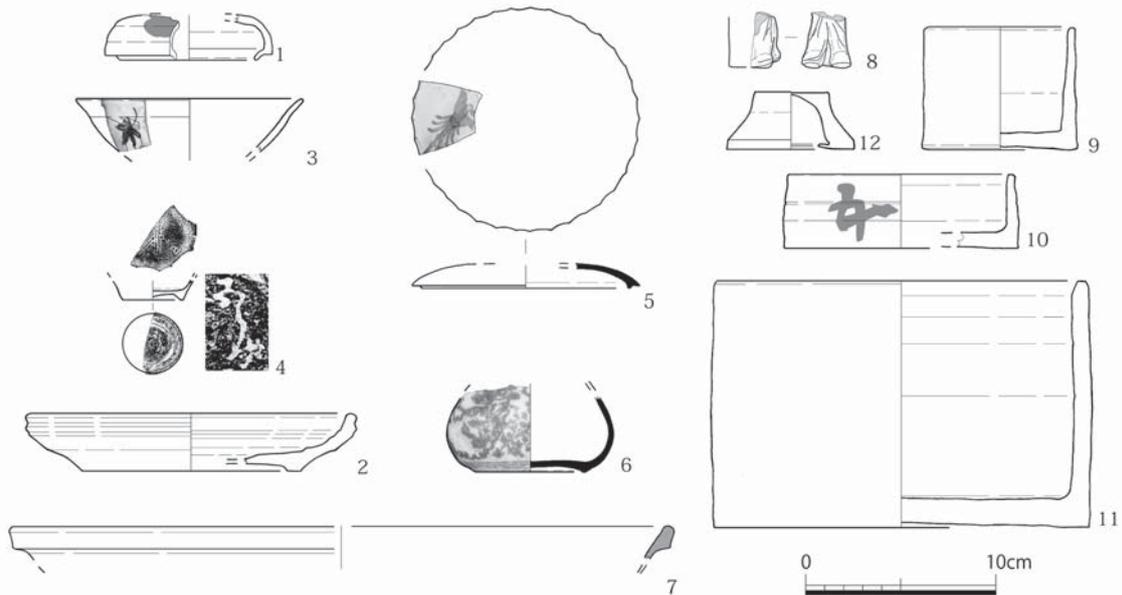


図 25 暗渠築造後層出土遺物 S=1/4

表 6 暗渠築造後層出土遺物観察表 (土製品・窯道具以外)

図	番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬など	生産地	備考
25	1	陶器	蓋	8.8 (最大)	不明	-	灰黄	鉄絵・透明釉	京・信楽系	
	2	陶器	皿	17.3	3.1	11.6	灰白	鉄釉	京都か	黄瀬戸風
	3	陶器	碗	12.0	不明	不明	黄灰	白化粧・鉄絵・透明釉・緑釉	京都か	外面に面あり
	4	陶器	鉢	不明	不明	3.2	にぶい黄褐	なし	京都か	銘あり 底部・体部内面におろし目状調整
	5	磁器	蓋	12.0 (最大)	不明	不明	白	染付	京都か	蓋物蓋
	6	磁器	急須か	不明	不明	5.8	白	染付	京都か	型作り
	7	土師質土器	焙烙	約 34.5	不明	不明	にぶい橙	-	津田か	外面に使用痕あり

全出土遺物 33 点中陶器が 10 点、窯道具が 6 点と目立つ。そのうち陶器には碗や行平鍋などが、窯道具ではより土などが確認できるが、ほとんどの遺物の器種は不明である。上層では全出土遺物 16 点中窯道具が 12 点と目立ち、そのなかでも特により土が多い。軟質施釉陶器や貝殻の出土がみられず、道仙窯側の他の層位とは遺物組成が異なる。出土遺物からの年代の推測は、出土数が少ない上に小片が大部分を占めるため難しい。



図 26 「鳳瑞精製」銘磁器 S=1/2

**暗渠築造前層** 中世の土師器が出土する層の上に形成されたこの層は、陶器と素焼のほかに土師器の割合が高いが、これは中世土層の遺物の混入が原因と思われる。陶器に碗や土瓶、素焼に皿、窯道具に匣鉢・より土・板トチなどの出土がみられるが、そのほとんどが小片で占められるため、器種不明遺物が多数に上り、年代の推定に困難が伴う。

**暗渠築造後層** 暗渠を設置した後にガラを用いて埋め立てた層のため、多量の遺物が包含している。陶器や素焼の他に、特に窯壁の割合の高さが目立ち、埋め立ての際に用いられた遺物の種類が反映されている。図 25・表 6 として遺物の実測図・観察表を示す。

陶器は 122 点中、碗 8 点、皿 4 点、行平鍋 4 点などが出土している。このうち小型の鉢 (図 25-4) には底部・体部内面におろし目状の調整が施され、底部外面に銘をもつ。

表7 土製品観察表

出土層位	図	番号	器種	モチーフ	縦	横	厚さ	胎土	釉薬	備考
ごみ穴下層	19	16	泥面子	人物	2.7	2.2	0.8	にぶい黄橙	なし	芥子面 表面・裏面にキラ附着
		17	泥面子	人物	3.5	3.1	1.0	にぶい橙	なし	芥子面 表面・裏面にキラ附着
		18	泥面子	人物	4.0	3.0	1.2	橙	なし	芥子面 裏面にキラ附着
		19	土人形	鳥	(3.1)	(3.1)	(2.3)	浅黄橙	なし	型合わせ (中空) 外面・内面にキラ附着
ごみ穴上層	23	30	ミニチュア	壺	(2.7)	2.2	不明	灰白	なし	高火度焼成品 型合わせ (中空)
		31	箱庭道具	塔	(1.6)	(1.6)	(1.1)	黒褐	鉛釉	高火度焼成品
		32	泥面子	「桐」文字	3.0	2.9	0.9	橙	なし	面打 表面・裏面にキラ附着
		33	泥面子	小判	3.1	推定 3.1	1.0	にぶい橙	なし	面打 表面・裏面にキラ附着
		34	泥面子	「水」文字か	推定 3.2	推定 3.2	0.7	淡橙	なし	面打 表面にキラ附着
		35	泥面子	人物	2.2	1.8	0.9	にぶい褐	なし	芥子面 表面・裏面にキラ附着
		36	泥面子	人物	3.2	3.3	1.5	にぶい褐	なし	芥子面 裏面にキラ附着
		37	泥面子	人物	(3.4)	(2.4)	1.2	にぶい橙	なし	芥子面
		38	土人形	人物	(4.9)	(4.7)	不明	にぶい黄橙	なし	型合わせ (中空)
		39	土人形	人物	(4.7)	(3.9)	不明	にぶい橙	なし	型合わせ (中空) 外面・内面にキラ附着
		40	土人形	人物 (西行か)	(3.3)	2.3	1.4	にぶい黄橙	灰釉・鉄釉	
		41	土人形	人物 (西行か)	(2.8)	(2.3)	(2.4)	にぶい橙	なし	型合わせ (中実) 表面にキラ附着
		42	土人形	狐	(8.4)	5.5	不明	にぶい橙	なし	型合わせ (中空) 外面・内面にキラ附着
		43	土人形	狐	(2.4)	(2)	不明	にぶい黄橙	なし	型合わせ (中空)
		44	土人形	魚	(5.0)	(7.3)	不明	灰白	赤土	型合わせ (中空)
		45	土人形	猿	4.2	(3.3)	1.6 (胴部)	灰白	なし	頭部型合わせ (中空) 体部手捻り
暗渠後層	25	8	土人形	人物	(3.0)	(2.6)	不明	灰白	なし	型合わせ (中空) 外面・内面にキラ附着

表8 窯道具観察表

出土層位	図	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬など	備考
ごみ穴下層	20	1	匣鉢	9.4	6.5	9.4	にぶい黄橙	なし	底部円形
		2	匣鉢	不明	不明	10.2 (最大)	にぶい黄橙	なし	底部円形 底部突出
		3	匣鉢	15.2	12.2	14.2	にぶい黄橙	なし (自然釉)	底部円形 「六」窯印
		4	匣鉢	不明	6.1	不明	にぶい橙	なし	底部正方形か
		5	匣鉢	不明	9.1	不明	にぶい黄橙	なし	底部隅丸四角形
		6	板トチか	5.9 (最大径)	1.1	-	褐灰	なし	
		7	足付板トチ	4.9 (径)	0.7	-	褐灰	なし	
		8	板トチ	5.8 (径)	0.6	-	にぶい黄橙	なし	製品痕跡あり
		9	輪トチ	5.9 (径)	0.6	-	にぶい橙	なし	
		10	円錐ピン	1.6 (最大径)	1.2	-	浅黄橙	なし	
		11	不明	1.8 (最大)	2.5	-	白	なし	窯道具か
		12	棚板	-	3.6	-	灰黄	なし	両面に窯道具溶着
ごみ穴上層	23	46	匣鉢	15.4	6.4	16.6	にぶい黄橙	鉄で絵付	底部円形 底部外面に磁器・釉薬附着
		47	エブタ	8.2 (径)	0.6	-	灰白	なし	窯印あり
		48	輪トチ	3.5 (径)	0.8	-	淡黄	なし	
ごみ穴後層	24	49	円錐ピン	1.5 (最大径)	0.9	-	にぶい黄	なし	
ごみ穴後層	24	16	匣鉢	16.4	12.0	17.2	にぶい黄橙	なし (自然釉)	底部円形 窯印あり 火前で使用か
		17	輪トチ	10.2 (径)	2.2	-	にぶい黄橙	なし	
暗渠後層	25	9	匣鉢	7.6	6.5	8.2	灰白	なし	底部円形
		10	匣鉢	12.0	4.0	12.4	灰黄	鉄絵	底部円形 「五郎助」窯印か 底部外面に釉薬附着
		11	匣鉢	19.4	13.1	19.8	にぶい黄橙	なし	底部円形
		12	トチおさえ	6.8 (最大径)	3.1	-	にぶい黄橙	なし	

磁器については23点中碗7点などが出土しているが、大部分の器種は定かでない。軟質施釉陶器2点の器種も不明である。土製品の割合はごみ穴に比して低く、そのうちの1点に人形の足部分(図25-8)を表現した例を確認できる。

土師質土器の焙烙(図25-7)は、ごみ穴埋没後形成層出土のものと同じ津田産の型作り製品で、先述のとおり明治33(1900)年から大正11(1922)年頃まで製作されていた型式である<sup>25)</sup>。

素焼は159点確認できるが、器種が判明するものは土瓶蓋1点、碗1点、皿1点、行平鍋1点、鍋1点、植木鉢1点に限られる。

全145点出土の窯道具に関しては、ごみ穴と同じく匣鉢・より土・板トチが大部分を占め、それぞれ、81点・33点・25点の出土である。板トチはその全てが薄い例である。その他に輪トチが3点、円錐ピンが2点、棚板が1点みられる。足付輪トチ・足付板トチ・エブタは確認できない。また、匣鉢のうち窯印を鉄で描くものがみられ(図25-10)、これは「五郎助」という文字を表わす可能性がある。

この層は明らかに浅見窯築造後の層位で、浅見氏の敷地内に入ることから、浅見窯にて生産された製品が高い割合を占めているものと思われる。年代の下限は明治30年を遡らないと推測される。

**表土** 出土遺物は多数に上るが大部分が小片である。陶器・素焼・窯道具の出土数が特に多いが、器種の判明する遺物はほとんどみられない。この表土近くから「鳳瑞精製」銘をもつ京焼の磁器が出土しているが(図26)、この銘が示す陶工と年代とは定かでない。

## 7. 文献・民俗調査の成果

**文献史料の調査** 発掘調査から推定された窯の築造年代をさらに明確に定めるために、入江道仙と道仙化学製陶所との動向を文献史料から探る。

窯場の沿革・様子を説明する類の史料では、まず18世紀初頭に編纂された『京都御役所向大概覚書』巻6が注目される<sup>26)</sup>。この史料の「清水焼」の項に3名の陶工の名が記され、そのうち当時の五条坂周辺においては慈芳院門前町に井筒屋甚兵衛の名が、大仏鐘鑄町南組に音羽屋惣左衛門の名がみえる。一方、安政2(1855)年に記された『陶器考附録』にも「清水焼」の項が設けられ何人かの陶工の名が記載されているが、この文献は作陶場所を定かにしていない<sup>27)</sup>。また安政4(1855)年に記される『本朝陶器考証』では、「山城清水焼」の項に16軒の窯元・窯主の名が挙がり、そのうちの13軒が五条坂近辺に所在する<sup>28)</sup>。しかし以上3史料においては、五条坂での作陶を想定することはできても、入江道仙の名を確認することはできない。

また、先にも触れた『当時窯持由緒記』には嘉永5(1852)年時の窯の所在地・持ち主・由緒が示される<sup>29)</sup>。当時の五条坂の窯主として亀屋平吉・伊勢屋与三兵衛・若狭屋茂八・音羽屋勘兵衛・音羽屋卯八・海老屋六兵衛・音羽屋弥七と井筒屋亀次郎(組合窯)・魚屋六兵衛と亀屋善兵衛(借窯)、丸屋卯兵衛の名前があがるが、入江道仙の名前は見当たらない。窯の由緒に目を移しても同様に道仙の名前は確認できない。

道仙の名が初めて確認できる史料は、明治5(1872)年に京都府によって編纂された『京都陶磁器説』である<sup>30)</sup>。これによれば丸屋佐兵衛・四ッ目屋仙次郎・道仙岩井屋九郎兵衛が共同で1窯、丸屋宇兵衛・浅水(見)五郎助・丸屋熊次郎が共同で1窯使用していることが記されており、ここに入江道仙とともに浅見五郎助の名前もみえる。しかしこの記述の場合、最も先頭に名前が出る人物が窯を所有しているとの解釈が成り立つため、この頃においても入江家・浅見家ともに自窯を持たないことが推測される。また、明治18(1885)年『清水五条坂製陶家提出出品目録』には入江道仙の名前は挙がらないが、浅見五郎助が「他家の窯を借用」とあり、この時点で未だ浅見家が自窯を持たないことが分かる<sup>31)</sup>。

明治以後の京焼の記録を残すことを目的として編纂された『京焼100年の歩み』に示される明治末の窯要図には、現在地に道仙窯が浅見窯とともに図示されている<sup>32)</sup>。すなわち文献史料では、明治末の時点で初めて現在地に道仙窯が確認できるのである。さらに昭和5(1930)年に河井磊三によって執筆された「五条坂に於ける窯の分布」には、「前は有名だったがいまは休んでいるが五郎助の窯」「道仙の窯には五郎助、安兵衛、柳三などが…(中略)…つめて焼いていると云ったわけである」という記述がみえる<sup>33)</sup>。つまり昭和5(1930)年には、道仙窯・浅見窯が既に存在しており、このころに浅見窯が休窯し浅見家が道仙窯を借窯していたことが推測される。

陶工の伝記を記す類の史料では、まず明治18(1885)年農務局・工務局編纂の『府県陶器沿革陶工伝統誌』に注目できる<sup>34)</sup>。ここには入江道仙の名前はない一方で、浅見五郎助が紹介されている。次に、昭和13(1938)年に塩田力蔵によって記された『日本陶工伝』の記事に着目すると<sup>35)</sup>、入江道仙は「寛永年間、初代道仙の創業なるが、三代道仙に至り、禁裏御用を拝し、明治四年には、舍密局の御用等を勤めた。同八年より化学用品を造り、大正以来に発展した。その道仙化学製陶所は、五條橋東四丁目である」と紹介されている。また浅見五郎助を紹介する記事は、『府県陶器沿革陶工伝統誌』を参考として、「二代、三代の六兵衛に習い、嘉永五年五條橋東四丁目に開業した。」「浅見五郎助も(清水六兵衛の)二代、三代の弟子で、嘉永五年に開業し、祥瑞五郎助などと称え出した」と説明している。これら2つの史料から両登り窯の所在は明確にならないが、昭和13(1938)年に既に入江・浅見両家とも現在地に仕事場があることを推測できるだろう。

**事務所保管文書類の調査** 道仙窯の南西に位置する長屋はかつて道仙化学製陶所が事務所を構えた建物で、そこには会社の文書類(帳票関係書類・建物配置図など)が保管されていた。事務所内の机の引き出しや物置に放置された状態で発見されており、コンテナ約20箱分の量がある。

これら文書類を調査したところ、土地売買の証明書である「証書」と題される文書には、入江道仙が明治26(1893)年11月10日に五條橋東4丁目449番地(道仙窯周辺)に土地・建物を購入した証拠が残されている。さらにこの文書には敷地内の建物図面が示されており、ここに登り窯が見当たらない(図27)。すなわち明治26(1893)年11月の時点で未だ道仙窯が築造されていないことが判明するのである。製陶所が現在の道仙窯周辺に会社を構える時期が知れると同時に、登り窯の築造時期の手掛かりともなる重要な資料である。

また、帳票関係書類(図28)に目を移すと、昭和期の会社の生産規模の変遷が追える。昭和7・8・9(1932・1933・1934)年においては、月1回・年間10~11回のペースで焼成が行われており、これは3代目道仙のこの時期に会社の最盛期をむかえていたという聞き取り調査の結果と合致している。さらに昭和初期とは対照的に戦中の帳簿からは、燃料不足や

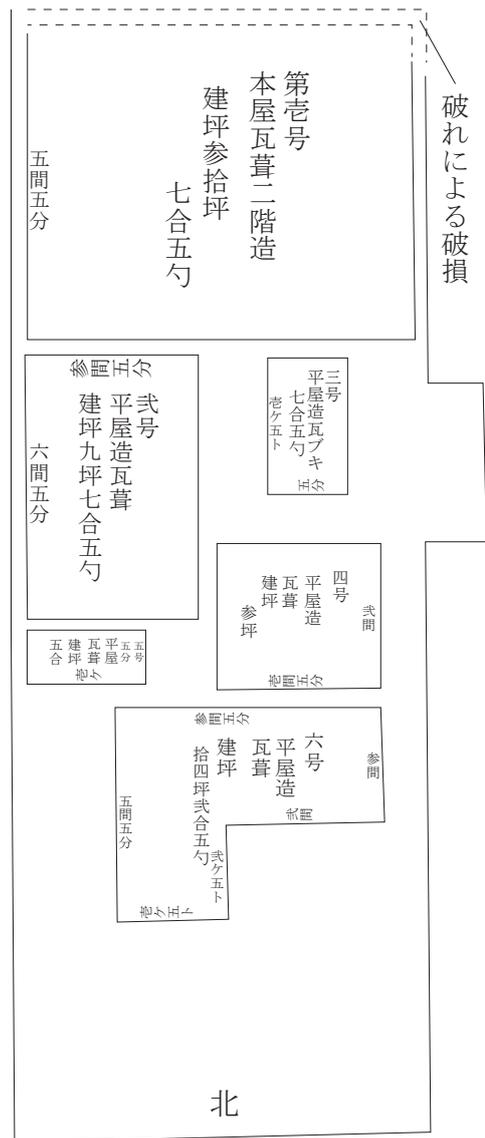


図27 明治26(1893)年の五條橋東四四九番地敷地図面(「証書」より書き起こし)

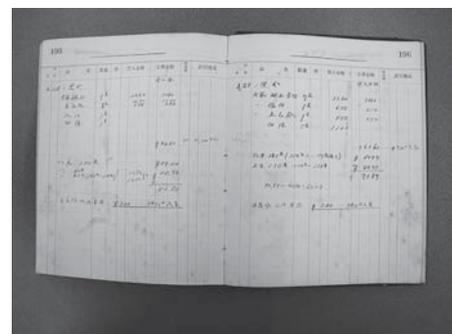


図28 道仙化学製陶所買入簿

強制疎開にともなう五条通り南側店舗の打ちこわしなどによる生産の不振を読み取ることができる。そして戦後に入ると、敗戦のインフレ・原料の高騰などで生産が厳しくなり赤字が続くことになる。これに加えて、昭和20年代後半から30年代前半にかけての理化学陶磁器業界の技術の高度化に追いつくことができず、衰退を余儀なくされる。道仙窯の操業停止時期に関して、「出金伝票」から、木割り工賃最終支払い日が昭和43(1968)年1月30日であることと、焼成工賃最終支払い日が昭和43(1968)年2月6日であることが分かる。また、「出勤簿」から道仙化学製陶所最後の轆轤師である笹原信雄氏の退職日が昭和43(1968)年2月9日であることが分かる。こうしたことから、登り窯の操業は昭和43(1968)年1～2月まで行われていたことが確認できる。

なお、入江家と浅見家との交流が活発であったことが文書から窺える。大正6(1917)年には、3代目道仙の3男震蔵が3代目浅見五郎助の養子となり、昭和元(1926)年に4代目浅見五郎助を継いでいる<sup>36)</sup>。この親戚関係を示すかのように、道仙化学製陶所の買入簿には昭和9(1934)年頃に両家が互いに窯の貸し借りをしていた記録が残る。これは登り窯の部位による焼成温度の違いを利用し、両家それぞれの製品を効率的に焼くためになされたものであろう。

**聞き取り調査** これまでの発掘調査のなかで、適宜関係者に聞き取りを実施している。登り窯の動向に関するものを挙げると、道仙窯に隣接する職人長屋で現在も桐箱の製造を続ける山本和夫氏の奥さんによれば、昭和37(1962)年1月に結婚したときは道仙窯が焚かれていたという。つまり、道仙窯はこれ以降に稼働を停止したことになる。また、6代目浅見五郎助氏によるところ、浅見氏が中学生であった昭和40(1965)年前後には浅見窯を焚いていたようである。

登り窯の動向に関するもの以外では、山本氏より、道仙化学製陶所の従業員は多い時で10人(少なくとも7、8人)いたこと、窯焚きは景気の良い時で1か月に2回ほど焚いていたこと、薪は丹波の松材を用い、東山警察署の前から運んで登り窯周辺で割っていたこと、入江道仙家は戦時中の強制疎開で立ち退きする以前には五条通りの南側にあったことなどの情報を得ている。また製陶所最後のロクロ師である笹原信雄氏への聞き取りによって、末期には笹原氏が手伝いの方と窯を焚いていたこと、窯焚きは1か月に1回程度から3か月に1回程度にペースが落ちたことなどが判明している。

## 8. 総括

**窯の築造年代と動向** 発掘調査の結果、道仙窯の下層に窯築造前に形成されたごみ穴が存在することが判明した。そして、これらのごみの廃棄年代を遺物の型式と銘の年代から明治初期と推定することができた。すなわち、道仙窯がこの明治初期以降に築造されたものと推測できたのである。また前年度までの調査によって、築造後廃窯に至るまでに少なくとも2度は窯の修復が行われていることが明らかとなった。

発掘調査に加えて文献史料から道仙窯の動向を探ると、幕末期には窯の存在を確認できないが、明治末には現在地に窯の存在が認められるため、この期間のうちのいずれかの時期に道仙窯が築造されたものと推測できる。また、製陶所の事務所に保管されていた文書類の調査によって、明治26(1893)年には未だ窯が存在しないことが判明し、築造年代をさらに絞ることが可能となった。これに加えて、会社の帳簿から昭和43(1968)年1月まで窯焚きを実施していたという重要な事実を足

すことができたのは大きな成果である。この結果は、昭和37(1962)年には依然として窯を焚いていたという聞き取り調査の結果とも矛盾しない。

一方で浅見窯は、基盤層の確定に至らなかったために、道仙窯との年代的な前後関係を解明するには及ばなかったものの、道仙窯と焚口を逆に並行する位置関係を考慮することによって、道仙窯と同時期に計画的に築造された可能性が高いものと推測できるだろう。そうして文献史料を参照すると、明治19(1886)年から明治末までのいずれかの時期に築造され、これに聞き取り調査の成果を加えると昭和40(1965)年前後まで浅見窯が稼働していたことになる。

**陶磁器生産の様相** 今回出土した遺物はいずれも道仙窯が理化学陶磁器製造の盛期を迎える以前のものである。特にごみ穴の遺物は、幕末から明治初期の五条坂における陶磁器生産の実態を探るうえで重要な遺物群となるであろう。亀屋清吉・幹山伝七・音羽屋総太郎など著名な陶工の作品を確認すると同時に、行平鍋や土瓶などの日用品が五条坂で生産されていた確証を得ることができた点は意義深い。また、瓶の例のように、名工の作品とはかけ離れた高級品とは呼び難い陶器が五条坂にて生産された可能性を残した。今後の調査の進展が俟たれる。

加えて、明治30年前後の年代を示すと推定される遺物群をごみ穴埋没後形成層と暗渠築造後層とに確認することができた。この年代の京焼発掘資料は管見の範囲内では見当たらないため、今後の資料の増加を俟って、より正確な年代の確定に努めなければならない。(米田浩之)

## おわりに

今回の調査によって、道仙化学製陶所窯跡の築造年代をおおまかにつかむことができた。道仙窯の築造以前に、この土地、すなわち五条通りの裏側は、登り窯関連の窯道具・失敗品の投棄場所になっていた。また、幕末から明治にかけての京焼関連資料を得ることができた。既存の京焼研究に欠落していた生産遺跡の考古学的調査と、明治以降の京焼の考古学的調査とを実現した点で意義深いものと思われる。しかもそれは理化学陶磁器という「もうひとつの京焼」であった。

今後はさらなる生産遺跡における考古学的調査を俟つと同時に、文献史料や伝世品からの既存の調査の成果と照らし合わせながら京焼の全体像の解明に努める必要がある。

調査にあたっては、入江太津治・麗子ご夫妻、故・湯浅士郎氏と楽只苑、浅見五郎助氏、山本和夫氏、笹原信雄氏、末広直道氏と藤平陶芸、河崎尚志氏とかわさき商店、佐野春仁氏と京都建築専門学校、石川晃氏、一島政勝氏のご協力を賜った。遺物については京都大学埋蔵文化財センター千葉豊氏に有益な助言を頂いた。遺物整理・図面整理の進行は、帖地真穂氏(本学文学部4回生)の尽力によるところが大きい。記して謝意を表したい。

なお、本遺跡の1～5次に渡る発掘調査は、行政公認の無届け発掘であった。文化財保護法に基づく発掘届けを提出するため、第1次調査に先立って京都市文化財保護課に相談したが、「当窯は行政的には建造物であって埋蔵文化財として認定できない。そのため発掘届けも受理できない」という主旨の行政指導を受けたからである。その大きな理由は「近現代遺跡」に対する行政判断にあり、京都市固有の問題も含むとは言え、文化庁や京都府の判断と連動する判断である。

今となっては稼働することのない登り窯たちが保存・活用され、五条坂における往年の陶磁器生産の様子を末永く物語り続けてくれることを願う次第である。(米田浩之・木立雅朗)

## 注

- 1) 京焼に関する主要な参考文献として、中ノ堂一信 1984『京都窯芸史』淡交社、岡佳子 2011『近世京焼の研究』思文閣出版などが挙げられる。
- 2) 京都市埋蔵文化財研究所編 2004『平安京左京北辺四坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告書第2冊）。
- 3) 京都国立博物館編 2006『京焼 - みやこの意匠と技 -』。
- 4) 第5次調査の速報については、2011年5月29日に開催された日本考古学協会第77回総会研究発表の場においてポスター報告している（木立雅朗・米田浩之・堀口智彦・御山亮済「現代京焼窯跡の考古学的検討－京都市五条坂・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査と民俗調査－」『一般社団法人日本考古学協会第77回総会研究発表』國學院大学渋谷キャンパス、2011年5月29日）。その際には、冊子も配布した。また、予備調査としてはじめた1次調査についても速報を発表しており、2～4次調査においては現地説明会を開催し、パンフレットを発行している。それらは下記の通りである。

木立雅朗 2006「旧・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査」『京焼と登り窯－伝統を支えてきたもの－』文部科学省 21世紀 COE プログラム京都アート・エンタテインメント創成研究（立命館大学）近世京都手工業生産プロジェクト

木立雅朗編 2006『京都市五条坂 道仙化学製陶所跡－知られざる京焼・化学陶器窯跡の発掘調査－』（現地説明会資料）、立命館大学文学部考古学コース・文部科学省 21世紀 COE 京都アートエンタテインメント創成研究（立命館大学）、2006年9月29日

木立雅朗編 2008『道仙化学製陶所窯跡第3次発掘調査現地説明会資料』（現地説明会資料）、立命館大学文学部考古学コース・文部科学省グローバル COE プログラム日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点（立命館大学）、2008年11月1日

木立雅朗編 2009『道仙化学製陶所窯跡第4次発掘調査現地説明会資料』（現地説明会資料）、立命館大学文学部考古学コース・文部科学省グローバル COE プログラム日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点（立命館大学）、2009年11月7日

木立雅朗・米田浩之・堀口智彦・御山亮済 2011『道仙化学製陶所窯跡 第5次発掘調査と民俗調査の概要』立命館大学文学部考古学コース・文部科学省グローバル COE プログラム日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点（立命館大学）、2011年5月29日

この他、下記で調査途中の状況を紹介した。

木立雅朗 2007「京焼と化学磁器―道仙化学製陶所窯跡の発掘調査と民俗例―」『東洋陶磁学会西日本地区研究会』於）東洋陶磁美術館、2007年9月29日

木立雅朗 2009「近現代都市・京都の窯業生産遺跡の調査・保存・活用・整備－五条坂・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査と民俗考古学的手法－」（『文化財保存全国協議会第40回記念京都大会 都市遺跡の調査と保存・活用・整備』於）同志社大学今出川キャンパス

片岡秀太・井藤七恵・鈴木香子・法寺岡宏枝・石川晃・木立雅朗『“もうひとつの京焼 化学陶器”展－五条坂・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査－』（展示パンフレット）、文部科学省 21世紀 COE プログラム京都アートエンタテインメント創成研究（立命館大学）近世京都伝統工業プロジェクト、2007年1月10日～1月30日

鄭銀珍・小林史晃・井藤七恵・法寺岡宏・木立雅朗『京焼の実験考古学と民俗考古学－乾山焼と五条坂をめぐる－』（展示パンフレット）、文部科学省グローバル COE プログラム日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点（立命館大学）京都文化研究班・立命館大学文学部歴史考古学ゼミ、2008年3月10日～4月11日

上記の報告紹介などにあたっては多くの方々からご協力頂き、様々なご教授も賜った。記して感謝の意を表したい。

- 5) それ以前に法蔵寺鳴滝乾山窯址発掘調査団が鳴滝乾山窯跡の発掘調査を行っている。初めての京焼窯跡の正式な発掘調査であり多くの成果を収めたが、残念ながら窯本体を検出することができなかった（垣内拓郎・山中信人・木立雅朗 2005『鳴滝乾山窯跡第1～5次発掘調査概報』法蔵寺鳴滝乾山窯址発掘調査団・立命館大学文学部・文部科学省 21世紀 COE プログラム京都アートエンタテインメント創生研究（立命館大学））。そのため、道仙化学製陶所窯跡は、正式な発掘調査された初めて、かつ、現状では唯一の京

式登り窯である。

- 6) 石川祐一編 2005『京都市の近代化遺産—京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書—〈産業遺産編〉』京都市文化市民局文化財保護課。調査した三宅宏司氏は陶磁器協会窯についても紹介しているが、2005年当時には消失しており、「現存せず」と注記されている。五条坂以外では、今熊野日吉町に所在する山崎陶苑窯、左京区岩倉木野町に所在する上田恒次郎窯が紹介されている。
- 7) 『隔莫記』は、赤松俊夫編 1997～2006『隔莫記』思文閣出版（復刻版）に所収。
- 8) 『当時窯持由緒記』は、中ノ堂一信 1988「京焼音羽・五条坂の変遷」『東洋陶磁』15・16 合併号に所収。
- 9) 富井康夫 1968「京五条焼物仲間の組織と機能」『社会科学』第1巻3・4 合併号、同志社大学人文科学研究所編。
- 10) 京都府編 1872『陶磁器説』巻2。藤岡幸二編 1962『京焼百年の歩み』別冊に所収。
- 11) 前掲注8に同じ。
- 12) 金森得水 1852『本朝陶器考証』は、堀田松三郎編 1943『本朝陶器考証』艸書房に所収。
- 13) 河井武一 1969「危機に瀕する五条坂の登り窯」『民芸手帖』5月号。
- 14) 前掲注13に同じ。
- 15) 本稿で述べる遺物の出土数は、すべて接合前の破片数とする。
- 16) 京都大学埋蔵文化財センター・千葉豊氏のご教示による。
- 17) 塩田力蔵 1938「日本陶工伝」『陶器講座』第2巻、長坂金雄編、雄山閣。
- 18) 及川登 1999「江戸遺跡における京都・信楽系製品の流通について」『江戸の物流』江戸遺跡研究会編。
- 19) 石川晃氏の聞き取り調査成果による。
- 20) 前掲注17に同じ。
- 21) 窯道具に関しては瀬戸・美濃における呼称を参考として、匣鉢・より土・輪トチ・足付輪トチ・板トチ・足付板トチ・トチおさえ・円錐ピン・棚板・エブタに分類して破片数を数えた。
- 22) 北村寿四郎 1925『湖東焼の研究』湖東焼の研究出版後援会。
- 23) 難波洋三「津田の土器作り」『第3回四国徳島城下町研究会四国と周辺の土器-焙烙の生産と流通-』発表要旨・資料集、徳島大学総合科学部歴史学研究室・関西近世考古学研究会・考古フォーラムくらもと編。
- 24) 前掲注23に同じ。
- 25) 前掲注23に同じ。
- 26) 『京都御役所向大概覚書』巻6は、岩生成一編 1973『京都御役所向大概覚書』下巻に所収。
- 27) 田内栄三郎 1883『陶器考附録』。
- 28) 前掲注12に同じ。
- 29) 前掲注8に同じ。
- 30) 前掲注10に同じ。
- 31) 『清水五条坂製陶家提出出品目録』は、中ノ堂一信 1981「明治前期の京都窯芸史料」『資料館紀要』第9号、京都府立総合資料館編に翻訳所収。
- 32) 藤岡幸二編 1962『京焼百年の歩み』。
- 33) 河井磊三 1930「五条坂に於ける窯の分布」『都市と芸術』205号。
- 34) 農務局・工務局編 1885『府県陶器沿革陶工伝統誌』。
- 35) 前掲注17に同じ。
- 36) 石川晃氏の聞き取り調査成果による。

(\*奈良県立奈良情報商業高等学校講師 (2011年度本学大学院卒業生)

\*\*本学文学部教授)

本研究は文部科学省 21 世紀 COE プログラム京都アート・エンタテインメント創成研究、および文部科学省グローバル COE プログラム日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点（立命館大学）、文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」（平成 22 年～24 年度分）により実施している研究成果である。